



TITLE:

ジュンガル王國の形成過程

AUTHOR(S):

若松, 寛

CITATION:

若松, 寛. ジュンガル王國の形成過程. 東洋史研究 1983, 41(4): 718-761

ISSUE DATE:

1983-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153879>

RIGHT:

ジュンガル王國の形成過程

若 松 寛

序 言

- 一 十七世紀初のオイラト族
- 二 カラクラの擡頭、その一—オイラト・モンゴル戦争—
- 三 カラクラの擡頭、その二—オイラトの内亂—
- 四 バートウル・ホンタイジの擡頭
- 五 ジュンガル王國の成立

結 語

序 言

本稿はオイラト族の民族國家ジュンガル（準噶爾）王國がジュンガル部長バートウル・ホンタイジ Bayatur qong tayiji（巴圖爾渾台吉）の下に形成された過程を實證的に論じたものである。彼は父カラクラ Qara qula（哈喇忽剌）の遺業を受け、オイラト族を統一した後、一六四〇年に大法典 Yeke Caajï を制定した。この大法典こそ新國家の統治體制に關する根本法であつたと解されるのである。バートウル・ホンタイジの後、ジュンガル王國の君主の地位を得たガルダン Galdan（噶爾丹）は一六七八年にダライラマ五世よりボシヨクトウ・ハーン Bošoytu qan（博碩克圖汗）に封ぜられたが、これよりジュンガル王國をジュンガル・ハーン國と呼んでも差支えない。

筆者は豫てよりジュンガル王國の成立期をバートゥル・ホンタイジの下に置き、この立場から王國史の研究を若干發表したが（それらに於てはジュンガル・ハーン國の呼び名が統一的に用いられている）、最近宮脇淳子氏が筆者の一聯の研究に對し、主として拙稿「オイラト族の發展」（『岩波講座世界歴史二三』所收、一九七二年）を題材に、研究ノートの形で全面的批判を發表された（『十七世紀のオイラト』「ジュン・ガル・ハーン國」に對する疑問——『史學雜誌』第九〇編第一〇號、一九八一年）。その批判の骨子は、宮脇氏は「一六七六年ジュン・ガル部のガルダンが、ホシユート部のオチルト・チェチェン・ハーンを襲い、その衆を併せて自らドルペン（四）・オイラットのハーンと稱するまで、「ジュン・ガル・ハーン國」——護氏（護雅夫氏——若松注）の言うように、それが『國家』という名に値するならば——などというものは存在しなかったという見解を取る。」という點にあるとしてよからう。このように同氏はジュンガル王國の國家としての存在をガルダン以前には認めないとし、「換言すれば「ジュン・ガル・ハーン國」というものは、もしあったとしても、ガルダンの登場以後のことであつたと結論づけることができるだろう。」としているのである。同氏の批判はそのような見地（又は前提）に立つて筆者に加えられていると言つてよい。それならば、十七世紀初以來ガルダンの登場に至るオイラト史を同氏がどのように把握しているのかと反問すれば、その問題についての同氏の見解は至つて不明瞭なのである。例えば、同氏は筆者の一六三六年以來のグシ・ハーンの青海進出に關する説を批判した件で、「故バイバガス・ハーン（ホシユート部長で一六二〇年代末に横死した——若松注）の殘したウルス自體は、依然グンジ・ハトゥン（先夫バイバガスの死後グシ・ハーンと再婚した——若松注）の手に掌握されており、彼女はグシ・ハーンの青海遠征に同行せずタルバガタイ方面に殘留した。しかも、バイバガスとグンジ・ハトゥンの子オチルト・タイジ、後のオチルト・チェチェン・ハーンはすでに成年に達しており、「ホンタイジ」號を有したジュン・ガルのバートル・ホンタイジも大きな勢力を持っていた。彼等の間の勢力關係が如何なるものであつたかが、オイラットのハーン位繼承に係わる大きな問題であるが、現段階では保留せざるを得ない」と言つて、バートル・ホンタイジの勢力の位置づけを行つていない。そのようにバートル・ホンタイジの勢力の評價を保留とす

るにも拘らず、別の一方では、「一六四〇年當時、彼等「兩タイジ」(ここでの意味はオチルト・タイジとバートル・ホンタイジを指す―若松注)の上には、グシ・ハーンが存在していたのである。」と言うが、筆者にはその理由がとんと分らない。もしそのようにグシ・ハーンがバートル・ホンタイジの上に立つ存在だったとするなら、矢野仁一氏の發した古くて今尚新鮮な「最も強いものが舊牧地を棄てて青海に移った」ということは如何であろう。」(『近代支那史』弘文堂、一九二五年、六七頁)の疑問に宮脇氏はどのように答えるつもりであろうか。筆者は矢野仁一氏と同様、「グシ・ハーンが最も強く、四衛拉特の首であった。」(『皇朝藩部要略』卷九)と言うことに強い疑問を抱くのである。

また宮脇氏は次のようにも言う。「彼等オイラットの諸首長の變遷や、相互關係など詳細な研究は後の課題として、四オイラットの諸部が、依然として聯合體としての側面を有し續けていたことを輕視することはできない。彼等の勢力範圍が、この時期青海からヴォルガ河方面へと廣がっていたと見ることも可能である。その中で、ジュン・ガルのバートル・ホンタイジが果たしてどれほどの勢力を持ち得たか、再考を必要とする問題であろう。」筆者に言わせれば、バートル・ホンタイジが果たしてどれほどの勢力を持ち得たかの問題こそ、オイラト族の國家形成を考えるための最優先課題でなければならぬのである。宮脇氏はこの問題に對する自らの解答を用意した上で批判を展開すべきであつたと思えてならない。

以下、宮脇氏の批判に答える意味からも、筆者はジュンガル王國の形成をバートル・ホンタイジに歸す從來の立場に立つて、その過程を實證的に論じたい。

一 十七世紀初のオイラト族

十七世紀初にオイラト諸侯の内誰が最強であつただろうか。この點について、一六一六年にトボリスクからカルムク地方へ派遣されたトミラ・ペトロフ *Томилъ Петровъ* とイワン・クニツィン *Иван Кунинъ* の供述に重要な言及が見

られる。

彼ら(ペトロフとクニツィン)はカルマク地方を通過してバガトゥイリ・タイシヤ Баратъ-тайша とイシム王子 Ишим-царевич まで二箇月の行程を要した。而して彼らはバガトゥイリ・タイシヤの許で一箇月過し、歸途は同じく二箇月を要した。

全カルマク地方で筆頭のタイシヤ *начальный тайша* はそのバガトゥイリ・タイシヤ Баратъ-тайша であり、これを全カルマク地方の王 *царь* と呼んでいる。だが彼自身は自らを王とは書かない。彼には下に四人の實兄弟—クアナイ・タイシヤ Куанай-тайша とイセントゥル Исентур (筆者注、他の二人の名は擧げられていない。)—があり、又タイシヤらの中に從兄弟や甥が多い。

親近の顧問のタイシヤ *лучшие ближние тайши* はチュグル Чюгур 及びウルク・タイシヤ Урук-тайша である。しかし全部で何名のタイシヤがいるのか、又カルマクは大凡人いるのか、この點については彼らはタイシヤの數を知ることゝ、人の數を數えることもできなかった。というのは多數いたからである。彼らは大タイシヤ *большой тайша* のバガトゥイリまで全て人の住む處を一月通行したが、どれだけ遠くへ行つたかは知らなかった。だが彼らはカルマク人との對話から、戦鬪には四人の大タイシヤが參集し、それらの麾下の兵士は一〇、〇〇〇人ずつであると聞いた。カルマク人は各自の土地で遊牧生活を送り、町はない。住居は全てフェルト製で、駱駝に載せて運ぶ。(PMO, I, Док. No. 18, п. 74—75. Cf. RMC, II, p. 38)

このようにペトロフらの報告は直接カルムクの土地を訪れ、しかもバガトゥイリ・タイシヤの許に一月も滞在して得た見聞に基づくものであるだけに、その信憑性は高いと考えられる。このバガトゥイリ・タイシヤとは、PMO, I. の編者注 (стр. 306) に言うようにドルベト部長の名に他あるまい。筆者はかつてこのような指摘にも拘わらず、この人物をジュンガル部のバートゥル・ホンタイジと解したが(「カラクラ」)、もはやその解釋は放棄せねばならないと考えている(既に拙稿「グシ汗」においては、この修正が採り入れられている。その稿第一節、参照)。後に馬曼麗氏がその「巴圖爾渾台吉與俄國」(『民族研究』一九八〇年第四期。後に『蒙古族歷史人物論集』北京、一九八一年、轉載)において、筆者舊稿「カラクラ」中の右の如き誤解に對して實證的に批判を加えられた。この問題を明らかにするために、馬氏の批判の主要な論點

を次に紹介してみよう。

馬氏の論點の一つに、上記のペトロフらの報告中バガトゥイリ・タライ・タイシャに大タイシャの稱號が冠せられてゐることから、大タイシャの解釋の問題がある。そもそも筆者がバガトゥイリ・タライ・タイシャをバートウルと同一視した原因は、パラス P. S. Pallas の「ハラフラの長子バートウル・タイジは既に一六一六年に父から分れてイルティシュ河に居住してゐた」⁽¹⁾との記事に依據したからである。この場合筆者は、バートウルが父から獨立分居してゐた事實の裏附けとして大タイシャの稱號を取り上げ、これを以て、『西域圖志』卷二十九官制一、附準噶爾舊官制、

準噶爾全境。分四衛拉特。各有首領以雄據之。尊其名曰大台吉。猶前代諸蕃部主之號也。

と見える大台吉に比定した。かくして「バートウルが一六一六年に既に父から獨立してゐたことはこの名稱を有することによつても確認されよう。」(カラクラ)と述べたのであつた。馬氏の解釋によれば、一六三四年までバートウルの父は在世したのであるから、當時のジュンガル部の首領或いは大台吉はカラクラ(ハラフラ)でなければならぬことは疑いなく、バートウルを大台吉と稱することは不可能である。而してダライ・タイシは當時正しくドルベトの首領であり、彼がドルベトの大台吉と尊稱されることは極めて自然の事である、と論斷された⁽²⁾。

大タイシャ(大台吉)の性格を四衛拉特各部の首領と解すべきことが明白となつた以上、ペトロフら報告中の四人の大タイシャとは、ドルベト部長のダライ・タイシ、ジュンガル部長のカラクラ、ホシユート部長のバイバガス、トルグート部長のウルリュクと見なされるべきであらう。試みにロシア文書群の中から大タイシャの實例を拾い上げて見ると、「大タイシャのカラクラ Караклуа, Большой тайша」(PMO, I, dok. No. 32, 1619年, 頁 169 ob.)「彼ら(カルムク人)の大タイシャのバイバギシュとその一味 多くの их тайши, Байбагыш с товарищи」(PMO, I, dok. No. 120, 1623年, 頁 8)タイシャのバイバギシュとその一味 多くの их тайши, Байбагыш с товарищи」(PMO, I, dok. No. 120, 1623年, 頁 8)があり、又大人 多くの люди も同じ意味であらう。「カルマクの大人のタライ・タイシャとグシエイ 多くの каймакские люди Талай-тайша да Гүйей」(PMO, I, dok. No. 77, 1630年, 頁 43)。タライ・タイシャは勿論ダライ・タ

イシであり、グシエイはグシーハーンを指す。グシーハーンの場合は、その長兄バイバガスが一六二〇年代末期に弑された（「グシ汗」）ので、一六三〇年當時既に大タイシヤの地位にいたことを示すものである。トルグートのウルリユクに大タイシヤを冠した實例のみ差し當たり提示し得ないが、これも該當したことに毫も疑いを存しない。因に一六三七年のロシア文書に見える「カルマクの大タイシヤ *Собутине Колмауке тайши*」(PMO, II, 406. No. 23, p. 22)に對して、編者注に「これは、トルグートのホリウルリユク、ドルベトのダライニボガトウイリ（一六三七年死）次いでその子ダヤンニオンブ、ジュンガルのバートウルフンタイジ、ホショートのバイバギシユである。」(PMO, II, 415, 416)と指摘している。バイバギシユについては年代的に誤りであるが、その他は筆者にも異論はない。

以上の如く、一六一六年當時のジュンガリアでは、ダライタイシを最強とし、これを含めて四人の大タイシヤが戦争の際等には協力し合う統治體制が成立していたと考えられる。

ペトロフらの報告中にダライタイシが全カルマク地方の王と稱されながらも、彼自身は自らを王とは書かなかつたことを言う。この場合の王とはハーンの謂に相違あるまい。但し彼自らはハーンと署名しなかつたと言うのだから正式公認の稱號ではなかつたと言わなければならない。それならば別に正統のカルムク王がいたのかと言うと、それこそホシユートのバイバガスであつたのである。ホシユート部はバイバガスの祖父ボバイニルザが初めてオイラトハーンを稱し、子のハナイニヤンニホンゴルがこれを繼いだ。而してハナイの子がバイバガスである。これを『外藩蒙古回部王公表傳』卷八十一、青海厄魯特部總傳に言う。

九傳至博貝密爾咱。稱衛拉特汗。子哈尼諾額洪果爾繼之。有子六。長哈納克土謝圖。次拜布噶斯。（以下略）

岡田英弘氏の力作「ウバシ・ホンタイシ傳考釋」（『遊牧社會史探究』第三冊、一九六八年）によれば、ボバイニルザが始めてオイラトハーンを稱した年代は嘉靖三十一（一五五二）年のアルタンハーンのホイト征服の頃で、「恐らくホイトの衰微に乗じてホシユートが興り、オイラトの指導權を握つたのであらう。」とされ、次いでオイラトはハルハのアバ

ダイーハーンによる一聯の征戦を受けて、ついにコブコル＝ケリエ Kobkör keirye の戦いで決定的敗北を喫し、ハナイノヤン＝ホンゴルも戦死した。この時アバダイは自分の子シュブーダイ Subuyadai をオイラトに留めてハーンたらしめた。コブコル＝ケリエの戦いの年代は萬曆十年代（一五八二—一九二）の後半に置くべきかと見ておられる。しかしやがてシュブーダイは叛いたオイラト人達に捕殺された。その年代は萬曆二十年代（一五九二—一六〇二）に求められるべきであらうと言う。アバダイーハーンの死後オイラト經營に従事したのはハルハの初代ジャサクトーハーン＝ライフルであった。ライフルはオイラトとエメル河口のシャラ＝フルスンで對陣して和を結んだ。これよりオイラトはハルハに納貢するようになった。その和の成った年代は萬曆三十四（一六〇六）年と斷定しておられる。

以上の歴史的經過を勘案すると、ボバイ＝ミルザのオイラトーハーンを繼いだハナイノヤン＝ホンゴルの戦死を機に、オイラトーハーン位はハルハのシュブーダイに奪われてホシュートから一旦失われたことになる。しかしシュブーダイの弑逆後、バイバガスがその父の地位を復活させ、オイラトーハーンの名の下にオイラト族を再結集してハルハに對抗を試みたと見られるが、武運拙なく一六〇六年にライフル＝ハーンの前に屈伏して和を結び、オイラト族擧げて納貢の義務を負わされたと考えられるのである。ここに至ってバイバガスの權威は著しく失墜したに違いない。そうなれば諸部長の間にオイラト全部の支配權をめぐって葛藤が生じて来るのは自然の成行きと言えよう。そのような過程の中から一六一六年までにダライータイシが最大實力者と目されるまでに成長したのではあるまいか。但しそうなっても彼が自らをハーンと名乗らなかつた譯は、ホシュート部長がハーンを名乗るといふ傳統を尊重したためであらう。尤もその頃のオイラトーハーン號の實質も單なるホシュート部長の地位を示すにすぎない程に成り下がっていたであらう。

さてバガトウイリ＝タライータイシヤの下で親近の顧問と呼ばれたチュグル及びウルリク兩タイシヤとは、ホシュート部のチュイクル Čüyükür (吹庫爾)⁽⁵⁾とトルグート部長ホ＝ウルリク Qo'rlög (和鄂爾勒克)とを指すに違いない。⁽⁶⁾「親近の」とは血縁上の親近關係を意味すると解せられる。事實、ダライータイシはウルリクの女婿であり (Pallas, op. cit.,

S. 36) 他方ウルリェクの子タイチン Таичин (Süker dayıçing 書庫爾岱青) はチヨクル Чокыр (チュグル、吹庫爾) の女婿 (PMO, I, Док. No. 72, 1628 冊, 頁 226 06.) の關係にあつた。顧問の果した役割の如きは不明であるが、こうした姻戚關係を通じての固い紐帶がダライータイシと顧問との間に存したことは等閑視されてはならない事象であらう。

因にオイラト諸侯の間は多岐の姻戚關係で結ばれていたが、特に注目すべきはトルグート部長ウルリェクの關係である。即ち彼の女婿にはダライータイシの他に、ジュンガル部のバートウル・ホンタイジがあり (PMO, II, Док. No. 64, 1644 冊, 頁 651) 又ウルリェクの妹がホシユート部長バイバガスの妃グンジーハトゥン Гүнжигатун であり、而して彼女は夫の没後はグシーハーンと再婚したのである (グシ汗)。このようにオイラトの有力諸侯がトルグート部を妻の里方としているのであり、この點を按ずると、トルグート Torğud の語義も『元朝秘史』中の torgud「里方。夫や夫の親族が、妻及び妻の父の親族を指す場合に用いられる言葉」(村上正二『モンゴル秘史』上 平凡社、一九七〇年、八三頁) と同様に解釋できるのではあるまいか。いづれにしてもオイラト諸侯が姻戚關係を少なくとも一つの紐帶として統治體制を作り上げていたことは確かであらう。

二 カラクラの擡頭、その一—オイラト・モンゴル戦争—

ペトロフらの報告によれば、彼らはダライータイシの許でアルトゥン・ハーン及びジャサクトゥー・ハーン配下の者達に出會つたが、それらはヤサク (毛皮・家畜等の貢租) を徴収するために來ていたのであつた。

彼らはカルマクで大バグトゥイリータイシヤの許でアルトゥン及び中國の民 Кытаекне мюди と出會つた。それらはヤサクのために來たのであつた。 (PMO, I, Док. No. 18, 頁 79)

この場合の中國人とは誤聞で、實際にはジャサクトゥー・ハーン部民であつたと考えられる (「カラクラ」)。ともかく一六一六年のこの時までオイラト人がハルハに納貢を續けていたことは確かである。こうした桎梏の下からオイラトの獨立の

ために闘い、ついにこれを勝ち取った立役者がジュンガル部長カラクラであったのである。この経緯はかつて詳しく考究したが（「カラクラ」）、ここに改めて骨子を述べよう。

さて一六一九年のロシア文書によると、ハルハのアルトゥン・ハーン（ウバシー・ホントイジ）はロシアのツァーリ・ニコライ・フィodorovichに宛に信書を送り、カルムクのカラクラ・タイシャとの抗争のためにロシアの援助を要請した。

私の請願することは以下の通りである。

我らと汝との間に使節が通い、そして我が商人には汝の國へ、汝の民には我が方へと通路が開けていべきであるが、そのような善事に對し我らの間で妨害しているのがカルムクのカラクラ・タイシャである。しかし彼らは人は多くない。それについては大君主には御存知である。そこで大君主なる白ツァーリにおかれては、トムスク、トボリスク及びタラの全ての人民に對して、君主の全兵士が我が方の兵士と共にその惡黨カラクラ・タイシャとその配下を征伐するよう命令を發せられるなら、私は我が方から自らの兵士を派遣して、互いの間に惡黨がいなくなり、又通路が開かれるようにしよう。惡黨を取り除いて通路が開かれれば、汝君主と我とに利益と善事が多いであらう。そして今より後互いの間に使節が頻繁に通うことにならう。（PMO, I, Док. No. 33, п. 32—33）

このようにアルトゥン・ハーンの敵としてカラクラが名指しにされている事實にまず注目すべきである。なおカラクラがロシア文書に出現するのはこの年を以て嚆矢とする。

一方カラクラも相手の動きに觸發されたかの如くモスクワへ使者を送り込んで、ツァーリに援助を要請した。使節廳 Посольский приказ での使者の口上は左の如くであった。

カルムクのカラクラ・タイシャは兄弟・子姪を擧げて大君主に以下の如く嘆願するよう命じた。即ちカラクラ・タイシャは兄弟・子姪と全部民を擧げてツァーリ大君の庇護の下に歸し、陛下の臣民の前に正しく行動する。そしてツァーリ大君の高き御手の下に眞の奴僕として永遠に渝ることなく入ることを宣誓する。大君主にあっては、我らを愛顧され、ツァーリ大君の高き御手の下に留めて優渥なる賞賜と命令を下され、且つ我らの敵から防衛保護されよ。（PMO, I, Док. No. 41, п. 4）

アルトゥン・ハーンの使者もカラクラの使者もモスクワへ入ったのは共に一六二〇年一月十日のことである。次いで各々にツァーリの接見を賜ったが、それも同じ同月二十九日であった (PMO, I, Dok. No. 41)。モンゴルの強酋として早くからモスクワに聞こえていたアルトゥン・ハーンはいざ知らず、カルムク諸侯が使者をモスクワまで通じ得たのは容易な事ではない。ロシア政府はその外交方針上、モンゴルやカルムクの使者がトムスクやトボリスク等に来てモスクワ通行を懇望しても、これを認めることには至って慎重であった。カラクラの遣使の場合も、豫めモスクワ通行の許可を得られる保証はなかったであろう。それにもかかわらず彼が敢てモスクワ遣使を試みたのは、事態の打開に寄せる熱意の發露としか言いようがない。他のカルムク諸侯で同じ試みをした例は見當らない。

ロシア政府は抗爭の當事者雙方からの援助要請に對して、雙方に各々同じ趣旨の敕書を授けた。それは要するに、大君主の庇護の下に入つた場合にのみツァーリは請願を嘉納して、軍事援助を與えるというものであった (PMO, I, Dok. No. 42)。しかし結局はロシア政府としては局外中立の立場を選ぶことにし、相次いでトボリスク知事宛訓令を發してモンゴル及びカルムクとの交渉斷絶を命じたのであった (「カラクラ」)。

モンゴル・カルムク間の抗爭はついに戰爭に發展し、最初の會戰が行われたのが一六二〇年後半期のことと考えられる (「カラクラ」)。この抗爭はアルトゥン・ハーンからのオイラトの獨立鬭爭と規定できる。鬭爭の先頭に立つたのが勿論カラクラであつた。戰爭の口火を切つたのもカラクラ側からだったらしい。

その湖 (ヤムイシ鹽湖) の附近に黒カルマク人、即ちタライ・タイシヤ *Talai-taiša*・ババガン・タイシヤ *Babagan-taiša*・メルゲン・タイシヤ *Meřen-taiša*・シエクル・タイシヤ *Šiekr-taiša*・サウル・タイシヤ *Sayr-taiša* 及びその他の多くのタイシヤが各目の全部民を伴つて遊牧しているが、その譯は黒カルマクのカラクラ・タイシヤ *Karakul-taiša* とメルゲン・タイシヤ *Meřen temen-taiša* がアルトゥン・ツァーリに攻撃を仕掛けたからだ。アルトゥン・ツァーリは彼らを擊破して、黒カルマクに攻め込んでいる。件のタイシヤ達はそれ故オビ河とイルトゥイシ河の間、その鹽湖附近に遊牧しているのである。 (PMO,

I, Rok. No. 55, 1621年, p. 97 06.)

このようにカラクラとトルグート部のメルゲンニテメニの側から戦端を開いたと報告されている。この戦いに他のタイシャ達が協力しなかった筈があるまい。右のタライータイシャことダライータイシの場合、筆頭のタイシャでありながらアルトゥン・ハーンに納貢義務を負っていたことを既に明らかにしたが、そのような者が桎梏からの解放を約束するこの戦いに率先参加せずして、徒に逃げ惑うばかりであったと考えるのは餘りにも不自然とならう。事實、タライはカラクラ軍が撃破された後、カラクラ、メルゲンニテメニらと共に全タイシャを擧げてオビ河右支流のチュムイシ河口に来て、堡壘を設けてアルトゥン・ハーンに備えて越冬遊牧しているのである（本文二〇四—一〇五頁引用の史料 Rok. No. 56 参照）。このような點から、ダライータイシがカラクラの仕掛けた戦争に無關係であったとは考えられない。むしろ彼の役割はカラクラ軍の後方支援にあったと言ふべきである。

カラクラ軍敗北の詳細については、トボリスクからカルムクへ派遣されたブハール人ムフタル Myxtrap がホシュート部のチョクル（吹庫爾）から直接次の如く聞き出している。

そのムフタルはカルマクのタイシャニ「チョクル Чокыр から對話中次の如く聴取した。

カルマクのタイシャニ「カラクラ Kapakyn はアルトゥンツァーリに向け攻め行つた。彼と行を共にしたのは四千人で、アルトゥンツァーリ麾下の部民を攻撃して、捕虜多數を奪つた。そして奪つてから退却した。次いでアルトゥンツァーリはそれらを取り押えるためにそのカラクラ・タイシャに向け四千人、背後に三千人を派遣して、カラクラ・タイシャ麾下の民を盡く打ち破つた。僅にカラクラ・タイシャのみ子どもを伴つて脱れた。そこで我らカルマク人は皆イトウイク Итук 山に沿ひ、カムイシユロフ Камыш-Юр 沿岸にトゥメニから十日行程に遊牧しているのである。」（PMO, I, Rok. No. 62, 1623年, p. 90）

このようにカラクラは敵に先制攻撃をかけてこれに一度は大戦果を得たものの、結局は惨敗を蒙つたのであった。上述の如く、この後カラクラ、ダライらを始め全タイシャらがチュムイシ河口の堡壘に一旦據つて再舉を圖つた譯であるが、

その後の事態の推移はカルムク側に不利に展開したと見られる。その譯は、一六二一年にタライータイシヤ他多數のタイシヤがイルトゥイシ上流右岸の鹽湖（ヤムィシ湖）に遊牧していたとされるが（上掲 Док. No. 35 参照）、翌二二年になると、この地方がアルトゥン・ハーン的手中に陥ちていることである。

トフルバイコ Тохудбайко はウルスラン・タイシヤ Уруслан-тайша に質問した。「何故汝はトゥメニ近くに移牧したのか。」ウルスランは彼に答えた。「我らを舊くからの牧地から押し出したのはアルトゥンの者共である。アルトゥンの者共はイルトゥイシ河の鹽湖に遊牧している。」(PMO, I, Док. No. 59, p. 83)

この鹽湖地方はダライータイシの本據地と目される場所であるから、これをも失ったことはアルトゥン・ハーンの攻勢がいかに激しかったかを暗示するものであらう。

一六二三年に入つてロシア側の情報網に、カルムクが總力を擧げてアルトゥン・ハーンとの會戦に備える動きが探知された。この年六月にカルムクからトゥメニに歸還したタタール人商人達の供述に言う。

今カルマクのタイシヤ達、即ちバガトゥイリ Баратырь・コゼニャク Козеник・ゼングル Зенгыл・バブガ Бабуга・カイカ Кайка・イシム王子 Ишим-царевич はイシム Ишим 河に遊牧している。イシム河の更に上流にはカルマクのタイシヤのウルルク Урлык・チュウクル Чукур がいる。彼ら全タイシヤがカムィシシュロフ Комышлов 河に向かってイルトゥイシとイシム河間に集結している。そこには彼らの家畜と家財もある。彼ら全タイシヤがムガール人（モンゴル人）に對する戰爭に備えている。だが各自の妻子・家畜・家財はカムィシシュロフ河に留めてある。(PMO, I, Док. No. 63, p. 90 ob.)

これらのタイシヤの内、バガトゥイリはダライータイシを、ウルルクはトルグート部長を、チュウクルはチュイクルを指す。カムィシシュロフ河はイルトゥイシ河の左支流で、今日のオムスク Омск 市近邊を流れる。その位置から按ずると、オイラト勢力がヤムィシ湖から遙かに北上（むしろ北竄）していたことになる。ロシア文書にはこの時のカラクラの姿は見えないが、恐らく彼の場合は、東方のオビ・トミ河間方面に居て（アルトゥン・ハーンの本據地ウブスヌール北邊に最も近い

ことになる)、最前線を作っていたのではあるまいか。

此の度の會戰の結果を直接教えるロシア情報は生憎無いが、この時アルトゥン・ハーンは戦死してモンゴル軍は大敗北を喫したのであった(「ウバシ傳考釋」)。このような重要な結論を『ウバシ・ホンタイジ傳』の分析から導き出したのは岡田氏の慧眼である。⁽⁷⁾ 事實、後年のロシア文書(РМО, I, док. No. 70, 1625冊)によれば、ダライ・ライシのかつての本據地ヤムイシ湖一帯がオイラトの手に戻っている上、當時のオイラトの内亂のためこの地方から多數のモンゴル人捕虜がモンゴルへ逃亡しているのである(「カラクラ」)。

それではこの決戦にカラクラはどのように貢献したであろうか。それはあくまで彼が最前線に立つて戦つて、而も大戦果を上げたと考えられる點にある。その大戦果とは、アバカン・Абакан 河を中心にイェニセイ河上流域にいたキルギス人をアルトゥン・ハーンから奪い取ったことである。

キルギス人が元來アルトゥン・ハーンにヤサクを納めていたことは確かな事實である。⁽⁸⁾ 例えば、キルギス諸侯ら自らの言葉として、

アルトゥン・ツァーリにヤサクを納めている。(РМО, I, док. No. 21, 1617年, 頁. 46)

とある。しかるに一六三八年九月にベールイ・Шыс Бельй Мисос 川(チュルイム・Чулым 河の源流)にいたキルギス公タブン Киргизский князь Табун とその母アバカイ公妃 Абакан-княгиня らの許に立寄ったトムスク派遣の使者の報告に、

アバカイ公妃は黒カルマク族で、カラクラの妹 Карагулина сестра であるが、キルギス人を盡く支配している。(РМО, II, док. No. 28, 頁. 16)

と云い、又、

アバカイ公妃とその子タブンにキルギス人は聽従している。(Там же, 頁. 17)

とも言つて、ジュンガルのカラクラの妹(姉?)が今やキルギス人を完全に支配していることが知られるのである。アバカイがキルギス公妃に納まつた時期はと言へば、その子タブン(他にもう一子イゼルチェイ Иезерあり)を儲けている點を按ずると、それは決して最近の事柄ではあるまい。それならば一六二三年の大勝利の直後に置くのが妥當と言うものであろう。その年から數えれば、一六三八年當時タブンも十四、五歳の少年ということにならう。結論的に言へば、カラクラは大勝利でアルトゥン・ハーンからキルギス人を奪い取り、これを統治するためにアバカイをキルギス公妃に送り込んだと推察されるのである。

以上述べて來た如く、カラクラこそは一六一九年のモスクワ遣使以來、一六二三年の大勝利に至るまで、モンゴルからの獨立のために終始オイラト諸侯の先頭に立つて粉骨碎身した人物であり、オイラト獨立の立役者であつたのである。

獨立へのこのような寄與と加うるにキルギス人の領民化とを以て、カラクラのオイラト諸侯間での地位は著しく向上したと言わなければならない。その地位向上振りを直截に示すと思われるのが一六二五年七月にダライータイシの本營に約一年滞在した後トボリスクに歸還したヤコフ・ブゴラコフ Яков Бугоракوف の報告である。

タライータイシャは次の如く述べた。彼は陛下の町や陛下のヤサク納貢の郷へ侵入もしなければ、その配下を派遣もしなかつた。

タール郡内の陛下のヤサク納貢の郷へ侵入したのはカラクラ・タイシヤ Kapaуyа-тайша の兄弟達である。カラクラ・タイシヤは自ら自分の部民を以て遊牧しており、彼タライータイシヤには抑えることが出来なう。(PMO, I, Док. No. 70, п. 42)

ブゴラコフはダライータイシに對して、タール郡へのオイラト人の襲撃の取締りを要求した譯であるが、ダライーとして、襲撃がカラクラの兄弟達の仕業であつたことを明らかにした上で、カラクラを抑えるだけの力のないことを理由に要求を斥けたのである。このような事實はダライータイシの地位低下と相俟つてカラクラの擡頭を如實に示すものである。

三 カラクラの擡頭、その二—オイラトの内亂—

さて一六二三年の決戦を境に、モンゴルに關する情報はロシア文書中に暫時全く跡絶えてしまいが、この原因はロシア側よりもモンゴル側に求められなければならない。つまりモンゴル側にあつては一六二三年の大敗の餘りの痛手により、對外的活動力を殺がれてしまったのである。モンゴル情報がロシア文書中に復活するのはようやく一六二九年のことで、この年五月にトムスクに届いた情報では、アルトゥンツァーリに向けてチャハル・ハーン Черпхан (リンダナー・ハーン) が進撃中とするものであつた (PMO, I, Док. No. 75, д. 502)。この場合のアルトゥンツァーリとは二代目ハーンの オンブ・エルデニ Омбу ердені (俄木布額爾德尼) である。

他方この間にオイラトにあつては、一六二五年にホシユート部でチン・タイシャ Чин-тайша (Čing 青) の遺産をめぐつて、その弟チヨクル・タイシャ Чокур-тайша (Čüyükür 吹庫爾) と再従兄弟バイバギシュ・タイシャ Байбагши-тайша (Baybagas 拜巴噶斯) との間に紛争が起り、これにダライ・タイシ、カラクラ、ウルリユクラが介入して、一大内亂を招いた。この内亂は二十年代末期に終熄したと見られるが、亂中ホシユート部長バイバガス (バイバギシュ) は殺害され、ホシユート部に甚大な被害をもたらした。これを契機にホシユート部の勢力も著しく低下したものと思われる。筆者はかつてこの内亂について考察したが (『カラクラ』)、そこには重大な誤りも見られるので、改めて以下に考察し直したい。⁽¹⁾

紛争の發端から内亂への發展の経緯は、一六二五年七月にタライ・タイシャの本營での一年間の滞在の後トボリスクに歸還したヤコフ・ブゴラコフ Яков Бугоракoв の供述によれば、左の如くである。

春に彼の所へ左の如きニュースが届いた。

チヨクル及びバイバギシュ・タイシャの兄弟チン・タイシャが死んだが、その家畜と部民はチヨクル・タイシャが我が物にして、兄弟のバイバギシュの自由に任さなかつた。そこでバイバギシュが来て、無理矢理にチン・タイシャの部民と家畜を取り上げた。こ

のためにチョクル・タイシャとバイバギシュの間に不和になり、彼らによつて戦が起りそうになった。タライ・タイシャはこの事を聞いて、和解させるために彼らの方へ赴いたが、自らも一千人を連れて行った。(中略)彼ヤクニカ Скачка (ヤコフ・ブゴロフ) を連れて行ったのは、チョクルとバイバギシュの間の出来事を教えてこれをトボリスクへ報告させるためであった。

さてタライ・タイシャはチョクル・タイシャの所へ来て、彼らの兄弟チン・タイシャの家畜は折半し、部民は五百人づつ分けるものとした。そしてバイバギシュの方には人を遣して、チョクルに對しチン・タイシャの部民五百人を送り返すように求めた。そこでバイバギシュはチョクルの方へ五百人を送ろうとした。だがチョクルは部民全員の一千人を取ることを欲した。このため彼はカルマクのタイシャ達即ちメルゲン・テムネイ Мелен-Темей、Кан Кун、タグタイ Тагтай と合同してバイバギシュに對し戦端を開いた。彼らの兵力は三萬だった。タライ・タイシャとしてはチョクルに與さずして去ったが、バイバギシュ・タイシャには夜間人を遣して、チョクルが大舉して汝を襲撃すると秘かに知らせた。

チョクル・タイシャは鹽湖より下流でバイバギシュ・タイシャに遭遇し、多數の者を殺し、且つ家畜を奪った。残された者達も河(イルトゥイシ河)の屈曲地に包圍した。このためバイバギシュには部民が少なくなり、皆散り散りになった。さてカラクラ・タイシャは、バイバギシュがチョクルに包圍されたと聞いて、チョクルに抗してバイバギシュを援助するためにバイバギシュの所へやつて來た。その兵力は一萬であった。かくしてチョクル・タイシャは虐殺を重ねつづつた。それから後、バイバギシュとチョクル・タイシャとの間に何が起ったか、それについては彼(ブゴロフ)は知らない。何故なら彼をタライ・タイシャがイトウイク Итук へ歸らせたからである。(PMO, I, Док. No. 70, p. 42—42 ob.)

このようにホシュート部に内紛が起り、このためドルベト部長タライ・タイシがまず調停役を買って出たが、チンの遺産をその弟チョクルと再従兄弟バイバギシュとの間で折半するという調停案をチョクルが肯んじなかったことから、その工作は失敗に終つた。飽くまで遺産の全額獲得に固執するチョクル(因に彼は一六二六年にタライの下で顧問に任じていたチュグルと同一人物である)に對しては、⁽¹²⁾タライはバイバギシュ支援を決意した。一方チョクルはトルグート部のメルゲン・テムネイやバートウト部のクヤンらの支援の下にバイバギシュに先制攻撃をかけ、ついにこれを鹽湖附近に包圍した。ここ

に至ってジュンガル部長カラクラもバイバギシュのために支援に馳せ参じた。この結果チョクルは包圍を解いて退却に移った。以上のように事件の経過を要約できるであろう。因にこの間にモンゴル人捕虜達がモンゴルへ向けて逃亡する事態も見られたが、それらは一六二三年のアルトゥン・ハーンに對する大勝の際に獲得された者だったに違いない（「ウバシ傳考釋」參照）。

これより以後の事件の推移をチョクルの動きに焦點を當てて迎つてみよう。一六二八年にチョクルはダライ・タイシ、トルグート部長ウルリユクらの聯合軍の追撃を受けて、イルトゥイシ河支流のイシム・トボル兩河間方面に逃れた。この年九月にカルムクからトボリスクに逃げ歸つたブルナシム・ロマツォフ Бурнаш Романов らの供述に言う。

彼らはカルマクでチョクル・タイシャ及びその女婿タイチン Тагчин—ウルリユクの子—の下にいたが、その二人が一緒に遊牧していたのは、タライ、ウルリユクとその他のタイシャ達がチョクル・タイシャを殺そうと望んでいる爲であった。それ故タイチン・タイシャは殺害の際を懸念して、全部民を連れてチョクル・タイシャから離れ、父のウルリユクの方へ去った。次いでダライ・タイシャと他のタイシャ達が多數のカルマク人を伴い、チョクル・タイシャをどこへも逃がさないか、又は殺すかする爲に、これに向けて出で行つた。チョクル・タイシャはイシム河の向こうへ逃げたが、トゥメーの先のトボル河に越冬しに行こうと望んでいる。（PMO, I, Док. No. 72, т. 226 об. — 227）

この情報から、チョクルが女婿のタイチン (Sukur daying 書庫爾岱青) の下に身を寄せたが、ついには後者から見離されたこと、チョクル追討の軍にはダライ・タイシの他に、ウルリユクも加わっていたこと、チョクルとしては今や更に西方トボル河方面へ逃れるしかなかったこと等が判る。

この内亂の大團圓を傳える情報として、一六三〇年五月にモスクワへその身柄を送致されたノガイ人デナイカ・デヴレーテフ Денайка Девлетов の供述がある。彼は「五、六年前」カルムク人のヤイク河（ウラル河）方面襲撃により、エンバ Enba (Эмба) 河の對岸のカルムク領へ拉致された者であった。彼の供述に言う。

彼はハンデリータイシャ Хандерс-тайша の所にいたが、當時そこへタイシャ＝バイバギシュ＝тайша Бакаров が来て、戦闘で殺された。彼バイバギシュの地位に代つてタイシャとなつたのがその兄弟チヨクル Теярр であつた。そのチヨクルとメルゲンニテメネイとハンデリータイシャらは一緒に遊牧したが、但しいずれも各自の部民を支配したのみであつた。彼らの率いた全部民は約四千強であつた。(PMO, I, Док. No. 77, p. 42—43)

これによれば、チヨクル一黨の下へバイバギシュが攻め込んだが、敢無くも敗れて「戦死」し、この結果チヨクルがホシュート部長を僭稱したことになろう。このバイバギシュ敗死の時期は正確には分らない。ただ當時のチヨクルの遊牧地がエンバ河對岸（つまり東岸）方面に置かれていたことは、彼が一六二八年以後トボル河方面から遙かに西遷したことを意味するものである。この點を按ずると、バイバギシュ敗死の時期も一六二八年以降のことと思われる。但しその下限は一六二九年秋までと狹めることができる。⁽¹⁴⁾ その譯は、デヴレーテエフの供述によれば、この年秋・春（當時のロシア曆では秋九月一日が年初であつた。）にチヨクルら前記の三人のタイシャ達がカルムクの大軍の反撃に備えていたと言ひ、その事はバイバギシュの復仇のための大軍を警戒していたことを意味しよう。果して一六三〇年四月上旬に大軍の來襲があり、ハンデリータイシャは捕殺され、チヨクルは戦死したとされる。

今年（一三八八—一六二九年九月一日—一六三〇年八月三日）の秋と春にその三タイシャは部民を伴つてヤイク河沿岸に遊牧した。彼デナイカが黒カルムク人らから聞いた所では、それらのタイシャ達はカルムクの大軍の到來を豫期していたことであつた。次いで約七週前、彼ら即ちチヨクルとメルゲンニテメネイとハンデリの下、ヤイク河へカルムクの大人タライータイシャとグシエイ Tyshai が現れた。彼らの伴つた兵は約一萬人強であつたが、チヨクルとメルゲンニテメネイとハンデリ麾下の多數の部民を殺し、その餘の者達は自分のウルスへ戻らせた。彼デナイカはその軍の來着の折、カルムク人の下から逃亡して、ヤイクのコサック人の所へ自分で來た。（中略）彼デナイカがコサック人の所にいた捕虜達から聞いたことには、カルムクの大タイシャ達がハンデリータイシャを括つた革紐諸共背後から斬つて、これを死に到らしめ、チヨクルは戦闘中殺されたが、メルゲンニテメネイについては知らな

いこのことであつた。(PMO, I, Док. 77, p. 42—43)

デヴレーテエフの言う約七週間前とは、供述書作成の日と推定される一六三〇年五月二十五日から溯って四月上旬頃となろう。この頃にダライ・タイシと、グシェイことグシー・ハーン（バイバガスの弟）とが大兵を擁してヤイク河方面に來襲して、決定的勝利を収めたのであり、ここにオイラトの内亂も終りを告げたのである。

この内亂を振り返って見ると、ダライ・タイシの果たした役割が改めて注目しに値いする。彼の場合、ホシュート部に紛争が発生するや率先してこれに調停を試み、それが不成功に終った後はカラクラ、ウルリユクラと共にバイバガス側に與した。而して叛徒のチヨクル一派の鎮壓には彼が最も精力的に協力した。バイバガス敗死の後グシー・ハーンを擁して遂に叛徒を撃滅したのも他ならぬダライ・タイシであったのである。このような彼の活動の原因は、彼がグシー・ハーンと姻戚者CBET（血縁なく結婚によって生じた親戚關係）（PMO, I, Док. No. 77, p. 48）の關係にあったという狭小な事情にのみ歸せられるものではあるまい。むしろそのような關係の上に立ちながらも彼があくまで事實上のオイラトの盟主であったという大情況にこそ歸せられるべきである。盟主の立場で彼はオイラト全體の統合を維持する責任を擔ったのである。そのような統合の維持を不可缺にした原因こそ他ならぬ宿敵アルトゥン・ハーン存在であった。

アルトゥン・ハーンに對しては、この間専らその對策に當つたのが、これまたカラクラであり、而して、その子バートウルであったと思われる。ロシア文書によれば、アルトゥン・ハーンは一六二三年以來七年間カラクラと戰爭狀態を續けたが、遂にその子バートウル・ホンタイジと和を結んだと言う。即ち一六三五年にアルトゥン・ハーンの側近のラマのダイン＝メルゲン・ランズ Дин Мерген-ланзу がロシア皇帝に送った嘆願狀の中に次の一節がある。

アルトゥン・ツァーリは黒カルマク（＝オイラト）のカラクラと七年戦つた。而して私はアルトゥン・ツァーリとカラクラの子コンタインシャ Контайша とを永遠の平和を以て和睦させた。（PMO, I, Док. No. 115, p. 125）

この發言の意味する所は、岡田氏が考えた如く（「ウバシ傳考釋」）、一六二三年アルトゥン・ハーンのオンブ＝エルデニ嗣立以來、七年間オイラトとの間に戰爭狀態が續き、一六二九年に和が結ばれたと解される。この年オンブ＝エルデニに

あつては、リンダン・ハーンからの攻撃に脅かされたのであり、このため腹背に敵を受けた形となつたことから、急遽オイラトと和してチャハルに當らなければならなくなつたのである。

このようにカラクラ及びその晩年には父に替つたバートウルとが専ら對アルトゥン・ハーン對策に當つたことは疑いの餘地がない。彼らのそうした活動はオイラトの東方防衛を果したことを意味する。内亂の初期にバイバガスを支援したカラクラが以後の鎮壓過程に全く姿を見せない理由も、この意味から説明できるであらう。

他方この内亂以後のホシュート部の形勢はどのように展開したのであらうか。その見通しを述べてみよう。第一に、敗死したチヨクルの遺衆はウラル河にそのまま取り残されて、結局トルグートのウルリユクの配下に吸収されたと考えられる。これが後のヴォルガ・カルムク王國內のホシュート部 Хошотовский улус の起源であらう。⁽¹⁵⁾

第二に、ジュンガリアの故地においては、バイバガスの歿後、急遽その二弟グシー・ハーンがホシュート部を總攬した。

このことは早くも一六三〇年のロシア文書中に彼に大人（＝大タイシャ）の號を冠した事實から證明される。同時にグシー・ハーンはバイバガスの未亡人グンジー・ハトゥン Gūnǰi qatun (Гунжа) を娶つた。つまりレヴィレート婚が行われたのである（グシ汗）。但しこの關係からバイバガスの遺した部衆もグシー・ハーンに歸屬したのではなく、それはあくまでバイバガスの長子オチルトウ ⁽¹⁶⁾ Ocirtu (鄂齊爾圖) に相續されたと見られる（オチルトウの異母弟アブライ Abrai 阿巴賴がその場合遺産分配に與つたのは勿論である）。オチルトウは亡父の遺した勢力を繼承したといえ、ホシュート部の統治にはグシー・ハーンの指導を當分の間は仰がねばならなかつたと考えられる。ただあくまでホシュート部長の正統繼承者はオチルトウでなければならなかつた筈である。その事の何よりの證據は、後に一六六六年オチルトウ・タイジ O chir thu thajiji にダライラマ五世からセチェン・ハーン Se chen rgyal po (Secen qan) の稱號を授與された事實である。ハーン號こそは正統のホシュート部長傳統の稱號であつたのである。⁽¹⁷⁾

第三に、グシー・ハーンにあつては、周知の如く、ダライラマ五世の要請に應じ一六三六年以來青海・チベット方面に進

出を圖り、翌年中央チベットに進んでダライラマから持法者法王 Bstan 'phags pa chos kyi rgyal po (Śaṅin bariyü nom-un ba) に封ぜられた。グシー・ハーン（願實汗）の呼稱の起源は實はここにあるのである。⁽¹⁸⁾ この場合それがあくまでチベットのゲルク派の護教王の稱號であり、ホシュート部長のそれではないことに改めて注意を拂うべきである。事實、グシー・ハーンに始まるその稱號はその直系の子孫の間で繼承されたチベット王歴代に授けられたものであったのである。⁽¹⁹⁾

このようにグシー・ハーンにはホシュート部長を繼ぐ正當な權利がなかったと考えられる以上、バイバガス横死直後ホシュート部を總攬する地位に立ったのも、緊急事態に對處するための臨時的意味合いのものと解する他ない。しかし、この事態もチョクルの敗死を以て解消に向かったはずである。グシー・ハーンとしては、恐らく一六三〇年直後に故バイバガスの大權をグンジー・ハトゥンとその子オチルトゥに委ねて、自らは側面からこの二人による支配體制を支持する立場に立ったのであろう。ここにはホシュート部長の大權はあくまでバイバガスの嫡子に譲られねばならないとする掟の如きものが嚴存したと考えられる。このような見地に立つと、英邁なグシー・ハーンにとってはジュンガリアに留まっていたまでもホシュート部長の下風に立たされるよりも、青海・チベット方面に新天地を拓く事業の方が遙かに魅力的に映ったのではないかと思われる。

さてカラクラに再び焦點を合わせると、前述の如く、彼は一六二九年に宿敵アルトゥン・ハーンの要請によりこれと和睦したが、この時既にジュンガル部長の大權をその長子バートゥルに實質上委ねていたらしく見られる。和睦の當事者としてモンゴル側からコンタイシャの名が強調されているのはその事を示すものであろう。カラクラは一六三四年に歿したと見られるから、彼としては當時最早老境に入っていたとしてよからう。彼の一生は舉げてアルトゥン・ハーンとの鬭争に費されたが、その晩年に和平を勝ち取った事で東方防衛の任に有終の美を飾ったと評さねばならない。

バートゥル・ホンタイジは父のこのような遺業を受けて、ジュンガル王國の建設に着手し、一六四〇年までにこれを達成したのである。それを記念するものがこの年の大法典の制定なのである。以下、この間の過程を述べよう。

四 バートウル・ホンタイジの擡頭

バートウルが父カラクラの跡を繼いでジュンガル部長となり、ホンタイジと號したのは、一六三四年乃至三五年初のことである。⁽²⁰⁾

彼の治世當初の事業はカザーフ遠征であつた。これについて、一六三五年七月トボリスクに來た白カルマク *Белые Калмаки* 族長アバク公 *князь Абак* の使者の供述に言う。

彼ら（使者ら）が白カルマクに居たとき、アバク公の下ヘヤサク徴收のため、黒カルマクから三十人程が來た。⁽²¹⁾ また同じ頃、黒カルマク人が四十人程キルギスヘヤサクのために赴いた。アバク公の下ヘ來た黒カルマク人らが言うに、黒カルマクのタイシャら、即ちタライータイシャ *Taray-taysha*、コンタイシヤ *Контайша*、クジータイシヤ *Кужа-taysha*、及びトウルゴチャータイシヤ *Toy-prog-taysha* が全ての黒カルマク人を伴つて、今冬カザーフ・オルダ *Казахы орда* の方ヘ赴いた。だがカザーフ・オルダ人も黒カルマク人に向かつて來た。黒カルマク人がカザーフ・オルダ人と遭遇したとき、大戦鬪が起つた。黒カルマク人はカザーフ・オルダ人を撃破し、後者からイシム *Ишим* の子ヤンギル王子 *царевич Шыыр* を捕虜にした。イシムとはカザーフ・オルダで王 *царь* であつた者だが、その王子が黒カルマクに抑留中である。

また別の黒カルムク人が同じタイシャらへ、即ちタライータイシヤ一黨に率いられて、再びカザーフ・オルダヘ戦争に行った。（*PMO*, I, Док. No. 123, p. 232 06.）

これによれば、ドルベトのダライータイシ、ジュンガルのバートウル・ホンタイジ、ホシユートのグシータイジ（クジータイシヤ）、及びグシの次兄クンドロンニウバシ（トウルゴチャータイシヤ）⁽²²⁾ らが一六三四年冬以來、カザーフ・オルダのヤンギル王子ことカザーフ大オルダのジハーンギール・ハーン *Jihangir Khan*（在位一六二九—一八〇年）に對し遠征し、これを撃破してジハーンギール自身を捕えた他、別に一六三五年夏頃に再び前記のタイシヤらが陣容を整えてカザーフに進軍

したことになる。但しこの二度目の遠征の結末はよく分らない。事實として、後にジハーンギール・ハーンはカザーフへ生還しており、而して一六四三年には却つてバートウル・ホンタイジ麾下の軍に敗北を與えている。

この一連のカザーフ遠征は恐らくダライ・タイシの指揮下に、オイラト連合軍の總力を結集して敢行されたと見られるが、西方へ向けてのこのような壯舉は十六世紀末以來のオイラト史上嘗て見られない事であつた。これにはバートウルによる東方モンゴルとの和平樹立が大きく寄與しているであらう。

一六三六年三月ロシア政府はバートウルに對して初めて公使 *Посланник Томира Петрова* の率いる使節團をトボリ斯克から派遣した。この公使の使命は、一六三四年にカルムク諸侯の分遣隊により拉致されたタール・トゥメニ兩郡内のバラバ・タートル人 *Барабинские татары* (オビ・イルトゥイン兩河間のバラバ草原に居たが、それらからのヤサク徴收權の問題がロシア・カルムク間で多年係争中であつた。) 捕虜の送還と、カルムク人によるバラバ・タートル人からのヤサク徴收の廢止とを交渉することにあつた。このような公使をロシア政府が他ならぬバートウルに宛てて送つたのも、今やその擡頭に深く注目していた證左である。因にロシア政府はバートウルに宛てて少なくとも十一次を越えるロシア公使を派遣しているが、それ程頻繁なロシア公使を迎えたカルムク王侯は他にはいない。

さてペトロフの報告 (PMO, II, Док. No. 9) によると、コンタイシャが述べた事には、「彼の父カラクラータイシャは陛下に奉仕して、町や郡や郷へ自ら攻撃に行かなかつたし、又その配下を派遣したこともなかつた。その代りに彼の父には陛下から賜物 *жалованье* があつた。彼コンタイシャも同じ様に陛下に奉仕する故、陛下の叛逆者のバラバ・タートル人のクグテイコ公 *князь Кугтейко* 一派を送還する。」(p. 40) とあり、又「今コンタイシャとしては、バラバ・タートル人から取つたヤサクについては陛下に慈悲を乞い、今後はバラバ・タートル人からヤサクを取らないよう指圖する。」(p. 42-43) とあつた。

このようにバートウルとしてはロシア皇帝に對し至つて恭順の意を表したが、その譯は皇帝からの賜物を欲した他に、

ロシアとの通商貿易を熱望したからである。但しこの時彼がその送還を約したクグテイコ公らは實は自らの意志でカルムクに逃亡した連中であつて、カルムク人の拉致したバラバタタル人捕虜とは別物であつた。このため後者の送還問題がシベリアの知事とバートウルとの間で多年交渉案件となつたが、その場合、バートウルは捕虜を文字通り小出しに送還して、その都度皇帝の賜物を引き出したのであつた。

ペトロフ一行は一六三六年八月にトボリスクへ歸着したが、これに随伴してコンタイシャ、その母アバハイ、その弟チヨグル Чюгур (Чукр 楚庫爾) 及びその二人の女婿から使者アバン = バガナエフ Абан Баганев 初め八人が派遣された。トボリスクでのアバンらの口上に左の如き一節がある。

去る一四三年(一六三四年)、タール郊外ヘクイシャ Кыша のウルス⁽²³⁾の兵が来て、ロシア人とタタル人を捕虜にしたが、クイシャータイシャはタールの捕虜の中の農民グリゴリー = アンドレーエフ Григорий Андреев をブハール(東トルキスタン)へ賣るために送つた。だがコンタイシャは、陛下に奉仕するため、その農民をブハールへ賣らせず、クイシャの使者から途中で取り上げ、それをアバン一行と共に陛下の方へ送つた。その奉仕の代りに、コンタイシャは賜物と陛下の使節の派遣とに關して陛下に嘆願せよと命じた。(РМО, II, Док. No. 9, п. 44—45)

このようにバートウルが捕虜の農民を送還して來たのも、自分への皇帝の恩賞を當て込んだ行爲であつたが、但しこの場合その農民がクイシャことグシ(ハーン)から奪ひ取つたものであることは注目に値いする。この一事からも、バートウルがグシに對して權勢上優位に立つていた様子が窺われるのである。

元來バラバタタル人の問題は一六三四年にクイシャータイシャ、タライータイシャ(ダライータイシ)、及びバートウル直屬の執事 приказный человек Кула の三人によるバラバ草原侵入に端を發したものである。これがロシアとバートウルの間で係争化したのは、ロシアがバラバタタル人を自らの納貢民と見なす立場から、拉致されたバラバタタル人の捕虜の送還とカルムク人によるバラバタタル人からのヤサク徴收の廢止とを他ならぬバートウルとの

間専ら交渉したからである。このようにロシアが交渉の相手に彼を選んだのも、彼のカルムクでの權勢を熟知していたからであろう。バラバ・タートル人の問題でカルムク側に交渉の當事者としてバートウルを指いて適任者なしとロシア側に目されたに違いない。この交渉の進展はバートウルに皇帝の賜物への思惑が絡んだので、バートウル側とシベリアの知事側との間に一進一退が繰り返された。一六四〇年にバートウルに派遣されたロシア公使レミョゾフの報告によると、コンタイシャ一家が今やバラバ・タートル人を盡く自らの納貢民の列に加え、彼らからヤサクを徴収している旨書かれている。

「レミョゾフ一行」バラバ、Баратаへ到ったとき、コンタイシャとチョクル Чокыр の使者らが陛下のバラバ人納貢民から狐の毛皮のヤサクを取り立てたが、バラバ人のことをコンタイシャとチョクル、及び彼らの母の納貢民だと稱した。そのためメニョイ = レミョゾフとしてはその使者らに對して、そのバラバ人達は陛下の納貢民であつて、コンタイシャのでもなければチョクルのでもない、と告げた。(PMO, II, док. No. 47, п. 39)

バラバ・タートル人はロシア、カルムクの雙方から納貢民扱いされ、所謂二重納貢民の境遇に置かれて來たが、一六四〇年のこの時には、彼らに對してカルムクではコンタイシャ一家がヤサクの徴收權を獨占していたと見られる。この徴收權の問題にはグシもダライも最早全く無關係であつた。事實、グシの場合、一六三六年秋以來その青海進出を開始しており、ダライの場合も一六三七年に死去しているのである。

さて一六三六年三月、トムスク知事により黒カルマクのバイバガスのウルスヘセンゲ・タイシャ Сене-тайша 宛、十人隊長セミョン・メゼニア Семён Мезеня が使者に立てられた。この使者の任務は、センゲ・タイシャに知事からの賜物を手交すると共に、彼に自らトムスクへ來て臣屬の宣誓を行うよう勸告する事にあつたが、これに兼ねてグシとバートウルに關しても同様の任務を附加された。トムスク知事のメゼニアへの訓令に左の如き一項がある。

又その勤務人達(メゼニア達)に對し、バイバガチュ(バイバガス)のウルス Байбараев улус へタイシャのクジ + Кыжа (ダ

シ)とオチエタ Очера (オチルトウ)に、及び大カルマクーウルス Большие Козмацкие ууусы でバガトウイリーコンタイシヤ Baraгыр-контаяна に、以下の如く告げるよう命じた。即ち、彼らタイシヤ達は我らに奉仕し、正直に振舞うべし。我がツァーリの高き御手の下に奴僕として入るべし。トムスクへ来て、知事の前で「タイシヤ達は我らに奉仕し、正直に振舞い、永遠の奴僕となり、トムスクへ自己の部民を交易のために派遣する」と宣誓すべし。(PMO, II, Док. No. 12, p. 409)

このような勧告をメゼニアから受けて、クジャとオチエタはその部民四人を、バガトウイリーコンタイシヤは五人をトムスクへ送り、これらの者を以て勧告通りの宣誓を代行せしめた (Там же, p. 409 об. — 410)。但しカルムク諸侯のこの種の宣誓が、彼らにとっては友好親善の意志表示に過ぎず、決して忠誠の證の如きものでもなければ、況してロシア皇帝への臣屬の約束の如きものでもなかったことに留意しておかねばならない。彼らとしては、この種の宣誓を以て、皇帝の恩賞や内戦の場合の軍事援助やシベリアの都市での交易權の獲得のための單なる手段と見なしていただけに過ぎなかったのである。

ところで右のトムスク知事の訓令中にバートウルーホンタイジについて、その治下のウルスを大カルマクーウルスと稱している事實に注目される。これこそバートウルーホンタイジ麾下のジュンガル部^{ウルス}が今やオイラトで強大な集團に成長していた實狀の反映に他ならない。

このジュンガル部の構成を具體的に言えば、ジュンガル人を中核にして、その傘下に北から南へバラバッタール人、テレウト人、イエニセイ^ニキルギス人を収めていたことがこれまでの敘述から判明したが、この他にも、西サヤン山脈西部のサヤン人もバートウル^ニの治下に置かれていたと言うことができる。この西サヤン人はアルトゥン^ニハーンの本據地のケムチク Кемчик 川流域の北鄰に居住していたのである。サヤン人の歸屬問題に關しては、一六三六—三七年にアルトゥン^ニハーンの側近ラマのダイン^ニメルゲン^ニランズに派遣されたロシア大使バージェン^ニカルタシェフ Бархат Кашаев^ニの報告に關係記事がある。大使一行は三七年三月、歸途にサヤン地方でサヤン人に十一頭の馬と羊を掠奪された

が、これについて言う。

バージェンとガラシム Гарасим (Тимофеев) はアルトゥンの弟のドゥラルータブン Дулар-табун に對し、サヤン人農民達 Санские мужики がバージェンとガラシムと勤務人達から奪ったその馬を彼から搜索を命ぜよと告げた。ドゥラルータブンはバージェンとガラシムに答えた。「その汝らの馬は搜索することができない。何故ならそのサヤン人農民達はテレスコエ湖 Телеское озеро から狩獵のためにその現場へ来るのであるが、彼らは黒カルマクのコンタイシャの納貢民 кнутаьмы であるからだ。」(РМО, II, док. No. 8, л. 33)

テレスコエ湖とは勿論今日のゴルノ・アルタイ地方東部のテレスコエ湖 Телеское озеро である。

以上の如く、バートウル・ホンタイジの治下のウルスには異種族のバラバ・タートル人、テレウト人、イエニセイ・キルギス人、西サヤン人も含まれることになり、文字通り大カルムク・ウルスを成していたと言えるのである。バートウル・ホンタイジ以外にこのような大ウルスを持ったオイラト諸侯の例をロシア文書中に見出すことはできない。

當時バートウル・ホンタイジはその本營をタルバガタイ(塔爾巴哈台)山陽のエミル(額敏)河源流域に置いたが、その附近のホボク・サリ Обой Сары (和博克薩里)²⁴に定住寺院都市を建設し始めたのも、こうした對外發展と呼應した現象と考えられる。

バートウルによる都市建設²⁵を最初に報じたのは一六三六年十月—十一月の間バートウルの本營に滞在したトボリスク士族オボリアノフ Обольинов, Ф. である(但しこの間、バートウル自身はグシの青海進出を支援して遠征中であつたため留守であつた)。彼がコンタイシャの本營で聞いた所では、コンタイシャが中國の近邊へも行き、石工五人を捕えたが、「モンゴルとの境界に石の町 каменный город を建てることを欲している。」(РМО, II, док. No. 38, л. 73v) とのことであつた。次いで一六三八年六月にターラ市からコンタイシャのホボク・サリの本營へ派遣されたコサック騎兵マルトウイノフ Мартынов, Е. の報告によると、彼らはコンタイシャの本營で捕虜のターラ市所屬ミハイル・チェルカシェン Михайл

Черкашенин から「コンタイシャはクバクサル Кубаксар 地方に町 городок を建てたが、もう一つを建設中である。」(РМО, II, док. No. 30, п. 352) と教えられた。

以上の二つの情報から按ずると、ホボク＝サリの最初の町は、「一六三七年初から一六三八年八月(マルトゥイノフらがクバクサルに到着したと推定される時期を指す)までの間に建設され、而してもう一つの町が建設中であつたと推定できる。」(Г. И. Слесарчук, указ. соч., стр. 114) としてよからう。

バートウルによる都市建設の情報はトボリスク知事にいたく不安を与えたことから、知事は直ちにターラ知事に通牒を發してマルトゥイノフらを詳しく訊問するよう要請した。その結果、既に建設された町の規模・機能等について大凡左の如く判明した(РМО, II, док. No. 30, п. 355)。

この町は、石で築かれたが、これを建設したのは中國人とモンゴル人であつた。町の四方に障壁(煉瓦積みと見られる)が巡らされ、その各邊の長さは五〇サージェン(約一〇七m)、高さは各二サージェン(約四・三m)であつた。障壁の内側に「石造のラマの住宅と廚房 жилище лабны избы и поварня каменные」が設けられていた。町の外周には堀も木柵もなかったが、町の一方が沼澤に、もう一方が川に面して天然の要害をなしていた。「その川から、水が入用の時には、町の中へ放流される。」と言うから、人工的灌漑設備があつたと見られる。

町には、四門の鐵製大砲が備えられ、その砲身は各四指尺あり、各一フント(〇・四一kg)の砲彈を使用するものであつた。これらの大砲は、「コンタイシャからそのラマに送つて來た」ものであるが、コンタイシャはこれらを「中國の地方で戦つた時に鹵獲した」と言う。この場合の戦いとは、グシを支援した青海遠征を意味するであらう(この遠征でのコンタイシャの動靜については、「グシ汗」参照)。

町の住民については、「その町には、ウエムチャ Уемча⁽⁸⁾と呼ばれるラマ лабаとその侍者のカルマク人達、及び中國人・モンゴル人・ブハハラ人の捕虜、その數約三百人が妻子と共に暮している。これらの捕虜は耕地を耕しているが、耕

作の習慣はブハー地方から取り入れられたものである。」と言う。

以上がホボク・サリの町に關するマルトゥイノフらの報告の概要である。要するにこの町が本格的な定住寺院都市であつたことは疑いの餘地がない。この町で農耕に従事した者はブハー人（東トルキスタンのトルコ族住民）が主體で、中國人やモンゴル人の場合は石工・大工等の職人や種々の雜役夫であつたと考えられる。後にジュンガル王國では多數のブハー人がタランチ *taranchi*（農夫）、サルト *sartu*（商人）、プーチン *pučin*（砲手）等の職業で活躍し、王國の發展に大いに寄與したのである。

バートウル・ホンタイジの町は、その後數を増して一六四三年には都合四つあつたとされる。この年コンタイシャをホボク・サリの本營に訪問したトボリスクのコサック騎兵グリゴリー・イリン *Григорий Ильин* の報告に言う。

コンタイシャには三つの煉瓦造りの町 *город* がある。その一つは白色（煉瓦積みの障壁の色であらう——筆者注）である。第四番目を新たに造營中である。町から町まで各一日行程である。それらの町にはコンタイシャのラマ達や農民達が住んでいる。（*РМО, II,*

рок. No. 64, л. 651）

バートウルの他にこの種の都市建設を試みた例が記録に現れて來るのは、バートウルの歿（一六五三年）後のことである。例えばイルトゥイシ路に由つて中國へ往復したロシア大使バイコフ *Байков, Ф. И.* の報告によれば、その往路に一六五五年四月、ホシュート部のアブライ・タイシャがベシユカ *Бешка* 河畔に二つの煉瓦造りの殿堂 *палата* を建設中であつたと記されている（*РМО, II, рок. No. 136, л. 75 об. — 76*）。これがいわゆるアブライの寺院都市アブライン・キツト *Ablai-yin keyid* である。その寺院の落慶法要は一六五七年冬にザヤ・パンデイタを導師として營まれている。

筆者はバートウル・ホンタイジの都市建設も亦彼のオイラト諸侯間での卓越した地位の反映と考えるものである。

五 ジュンガル王國の成立

バートウル・ホンタイジが既に一六三六年には大ウルスを擁し、三十七年頃から都市建設を開始したことは上述の如くである。ここでこの頃のバートウル・ホンタイジと他の大台吉との關係を一瞥しておこう。トルグート部長ウルリユクの場合は、既に一六二七—二八年の頃にその部衆を率いてジュンガリアからヴォルガ河流域へ根據地を移してしまっている(ИИЖХ, стр. 148)。ホシュート部のグシー・ハーンの場合も、一六三六年秋から青海遠征を開始して、そのまま青海地方に居坐ることになり、二度とジュンガリアを根據地とすることがなかった。この遠征にはバートウル自身も参加したが、彼の場合は一六三八年春にホボク・サリへ歸還している。當時のバートウルの卓越した權勢を考えれば、この遠征を主宰したのも彼以外には考え難いことである。引續きグシー・ハーンが青海に殘留したのも、バートウルからゲルク派の保護事業を託されたためと考えられるのである。

ドルベト部のダライ・タイシの場合は、ロシア文書中にコンタイシャが脚光を浴びるに反比例して、急激に精彩を缺く存在となり、而も一六三七年に死去してしまつた。その後には二人の子による父の遺産争いが殘された。

タルハン Тархан (ダライ・タイシャの配下) は昨一四五年(一六三七年)、タライの子達のところへ行つたが、それはダライ・タイシャが死去して、その二子が残つたが、彼らが互いに父のウルスを廻つて戦い合おうとしていたからである。(РМО, II, Док. No. 27, л. 24 об.)

ダライ・タイシの死後に残つた子どもは二人だけではないが、父の遺産を争つた二人とは、その第三子トイン・オンボ Toyin ombo (Доеи-Онбо 托音) と第四子ダイチン・ホシヨーチ Davčing qošouči (Тафтин-кошучи 鄂木布代青和碩齊) である。軍配は翌三八年頃に一應トイン・オンボに揚がつたと見られるが、ダイチン・ホシヨーチとの不和は長く解けず、このため部内も不安定が続いた。しかし四四年にダイチン・ホシヨーチがトルグート部に殺されてからは、トイン・オンボのドルベト部長の地位もようやく安定したと考えられるのである(「センゲ」)。

以上の如く、一六三七年以降ジュンガリア・イルトゥイシ上流域には嘗ての大台吉は一人も存在しなかったのが實狀で

あり、最早バートウル・ホンタイジに拮抗するオイラト諸侯もいなかったのである。

モンゴルのアルトゥン・ハーンと比べても、バートウル・ホンタイジの勢威は今やこれを凌駕するとオイラト人に受け取られた。この點について、一六三八年にトムスクからアルトゥン・ハーンの許へ派遣されたスタルコフ Старков, В. の報告に、往路アバカン河方面のキルギス人の地方（この地方はカラクラの妹アバカイ公妃が支配していた）を経由した際に、ジュンガルの某台吉から次の如き發言がなされたと記されている。

バガトゥイリーコンタイシャのウルスの黒カルマクのタイシャがその配下のカルマク人らを伴つて我々の野營へやつて來て、（中略）言つた。「皇帝はアルトゥン・ツァーリを愛顧し、これに多數の皇帝の賜物を我がキルギス地方を経由して送っているが、アルトゥン・ツァーリは我がバガトゥイリーコンタイシャよりもどれだけ偉大 больше であるのか。アルトゥン・ツァーリはイルデネー・コンタイシャ Ирдене-контайша（≡ Eriden qungtayji）であるが、我がタイシャも同様にバガトゥイリーコンタイシャであるぞ。」（PMO, II, Док. No. 28, д. 17）

このジュンガルの某台吉の發言にはバートウル・ホンタイジがアルトゥン・ハーンに勝るとも劣らない存在であることの誇りが感じ取れるのである。因にこの頃のアルトゥン・ハーンは最早バートウル・ホンタイジに軍事的脅威を與える存在でもなかった。何故ならば、北モンゴル族は擧げて清朝の擡頭に怯え、自らを守ることに汲汲たる情況にあつたからである。

ここでバートウル・ホンタイジの地位を確認するため、一つの重要な史料を紹介しよう。それは一六四四年にロシア皇帝に宛てたバートウル・ホンタイジの書簡に見える左の如き一句である。

こちら側では我はバードウルホン Бадурхон（この書簡中の用例から推して正しくはバードウルホン・タイシャ Бадурхон-тайшаと書かれていたのであらう。なおロシア語譯の原文はノガイ・タール語と云う）である。我々兩者は各自の國家 Государство に対して君主 Государи である。我々の國家が平和と友好の内にあれば、我々の名譽のために好ましいであらう。（PMO, II, Док.

このように今やバートウル・ホンタイジは自らを君主と稱しているのである。彼の稱する君主がロシアのツァーリに準えられている以上、それはオイラトの君主を意味したと見るのが自然であらう。

以上述べて来た所を総合すると、かの一六四〇年の大法典 *Yeke Čaŋi*こそジュンガル王國成立の記念碑的所産であつたと考えねばならない。そのように考える理由は大法典自體にある。大法典の規定は内容上以下の三群に分類される。「法典の基本的目的は、單に最初の諸條だけで明らかである。即ち種族間の同盟を強化し、同盟内の安寧秩序を維持し、外敵の攻撃に對し防衛を組織することである。これらの目的は法典前文に掲げられているから、法典が先づ第一に蒙古諸種族間の關係に關するものであることは當然である。これに見える一聯の規定は同盟の軍の性質を示し、攻撃防禦の關係を定めている。次の一群は蒙古社會の社會構成を大體定め、第三の群は蒙古人の主要な生業——牧畜と狩獵——を規定している。」⁶⁰⁾而して規定の内容上の特色として、「とくに刑罰規定において、大ヤサのそれと著しい違いのあるものの認められることと、固有のシャマニズムを禁壓してラマ教を支配的宗教と規定していること、そしてなによりも、家畜と隸民を所有する聖俗の貴族の封建的特權を明確に規定していることとである。」⁶¹⁾

ここで注意すべきは、こうした諸規定が西蒙古人社會の内部關係を色濃く反映していることである。リヤザノフスキーはこのことを西蒙古人の氏族生活及び氏族關係、狩獵の方面について指摘し、又以下の如く述べている。「内容から見ると、法典は西蒙古諸種族の生活に關するものであり、事實、法典は長い間西蒙古人（オイラート及びカルムク人）の間に效力を有し、ハルハ人の間には效力をもつていなかった。この點から、法典の立案者はオイラート人でセイム（集會）はたしかにジュンガリアで行われたと結論し得る。」⁶²⁾

このように大法典は西蒙古人社會に最も適合するように制定されていたのであり、それ故にこそ後にガルダンによりこの法典を補足する二つの敕令が發布され、又ヴォルガリカルムク人の間に一九一七年まで效力を有していたのである。こ

れに反しハルハ人の間ではその地方的慣習法に基づき十八世紀初以來一連のハルハジロムが制定されて、大法典は效力を失って行ったのである。

以上の如き大法典の性格から見れば、その制定の立案者はバートウル・ホンタイジであり、制定のための集會の場所もジュンガリアこそ適しいのであって、その場所をハルハに置く必然性は何もないであろう。⁶³ 近刊のドゥイルニコフ ДЫРНИКОВ, С. П. 著『イフ＝シャーズ〈大法典〉』(Их Шаас «Белое уложение», Памятник монгольского феодального права XVII в., Москва, 1981, стр. 3) ではその場所をタルバガタイ山のウラーン＝ブラー・Улан-Бура (Ulan burā) に當っているが、傾聴に値いしよう。バートウル・ホンタイジはそのオイラトの支配權の確立を背景に、ジュンガル王國の對外・對内關係の整備を行い、この結果生れたのが大法典であつたと考えられるのである。

この法典制定のための集會は、清朝の擡頭に怯える北モンゴル族に諸手を舉げて歓迎されたであろう。彼らとの軍事同盟はバートウル・ホンタイジにとっては、ジュンガル王國の背後から直接加えられる軍事的脅威を除去する意味で重要であつた。しかし當の清朝に對してはジュンガリアのバートウル・ホンタイジには未だその脅威を深刻に感じ取られてはいなかつたであらう。況してヴォルガ河流域のトルグート部長ウルリユクの場合は餘りにも遠隔地に居てその脅威とは無縁であつたはずであり、又ホシュート部のグシーハーンの場合は、青海征服直後の一六三七年にオイラト諸酋に先んじていち早く清朝へ遣使入貢して、清朝との友好路線を闡明していたのである。そうした情況にもかかわらずウルリユクもグシーハーンも集會に参加しているのである。その事實も亦集會がバートウル・ホンタイジにより提唱されたことを裏書きするものであらう。しかも集會の重要な目的がジュンガル王國の内外秩序の整備に置かれた以上、オイラト諸侯としては擧げてこれに参加しなければならなかつたのである。このように考えると、集會がハルハで行われたとする必然性は至つて薄くなるのである。

この大法典で規定された軍事同盟は、バートウル・ホンタイジにとっては、東方の北モンゴルとの關係安定を背景に、

西方の東西トルキスタンへの軍事進出を開始するためにこそ意味があったのである。果せるかな早くも一六四三年前半にバートウル・ホンタイジは、カザーフ大オルダのジハーンギール・ハーン Jhangir Khan 及びブハーラー・ハーン (Abd al-'Aziz) 下のヤラントウシ Yalantush に對して、實に五萬の軍勢を繰り出したのである。

〔コンタイシャは〕自分の女婦コチュルタ Кочурта (鄂齊爾圖)、『アブライ Абылай (阿巴賴)』、自分の弟チョクルータイシャ Чокур-тайша (楚庫爾)、『コニニサルタン Кой-салтан (輝特部 Qoyid のスルタン・タイシ Sultan tayshi)』、黒ムガール (北モンチル) のアルトゥンの子 Алтын сын 及び小タイシャらと共に、『カザーフ・オルダのヤンギル王子 Янгир-наезич』とヤラン・タシ Ялангыш とアラタウ＝キルギス Атага-киргизы に對して戦争に行つた。それらの伴つた兵は五萬であつた。(PMO, II, Док. No. 64, п. 646)

コンタイシャは、『アラタウ＝キルギスとトクマク Tokmak の二つの地方の民約一萬を奪ひ、(中略)、『ヤンギルから奪つたそれらの民を拉致して歸つた。』(Там же, п. 650—651)

このように北モンゴルのアルトゥン・ハーンまでがその一子をコンタイシャに助勢せしめたことは注目に残す。ハーンも亦コンタイシャの西方遠征の利に與かろうとしたのであろう。大量の捕虜を拉致した意味は、農耕初め各種の勞役に驅使するためであつただろう。

一六四〇年前後以降のバートウルとロシアとの關係⁶⁴の一面を次に述べよう。バートウルの使者がモスクワへ初めて許されて入つたのは一六四〇年初のことである。その使者はツァーリにバートウルの賜物下賜の請願を言上して、ほぼ請願通りの各種の賜物を授けられた (См. PMO, II, Док. No. 44, 46)。これに味をしめたのかバートウルは四一、四二、四三年に毎年トボリスクに使者を送つてモスクワ通行を求めた。しかしその都度トボリスク知事により同じ趣旨の使者の繰り返しは無用として拒絶に會つた。知事の態度に業を煮やしたバートウルは一六四四年十月にツァーリに宛てて信書を送つて、その中で使者のモスクワ入京不許可の場合は國交斷絶すると威嚇した。

もし入京を許さないならば、今後使節を派遣しないであらう。(PMO, II, Док. No. 68, p. 3)

このようなバートウルの強硬姿勢もオイラト君主としての自信から出たものであらう。この信書を持参した使者は急遽トボリスクからモスクワへ通されて異例の款待を受けた。そしてツァーリの接見を許された後、コンタイシャへの賜物を約束する旨の優渥なる敕書を授けられて歸された(PMO, II, Док. No. 79)。他方トボリスク知事にも一六四五年十二月十四日附の敕書が發せられ、そこには次の如く命令されていた。

コンタイシャの使節は些かも留置することなくモスクワへ通せ。(中略)その商人には我がトボリスクとその他の町において、先の我が敕令に沿って十分に配慮して交易せしめよ。(PMO, II, Док. No. 82, p. 120 об. — 121)

ところでロシアとカルムク間の交易はシベリアの諸都市にとって實は死活の問題であつた。この問題と關聯して交易一般について少し論じよう。ロシア政府はシベリアの邊境安全の配慮から、一六四六年六月に敕令を以てトゥメニ市でカルムク人と交易することを禁止し、このため交易はトボリスク、トムスク、ターラの三市に限定された。この禁令はトゥメニ市民を非常な苦境に陥れた。一六四七年七月に全市民擧げてトゥメニ知事に差し出した嘆願狀には、「馬がなければ、公務員には陛下への勤務が、農民には農耕ができなくなる。そうならないように、従前通り商品を携帶したカルムクの使節をここに入れ、それらと自由に交易させて欲しい。」(PMO, II, Док. No. 93, p. 500)と訴えている。亦この嘆願狀には馬の疫病死が毎年起こり、そのためにも從來毎年缺かさずカルムク使節から馬を買い入れたとも言っている(Там же)。こうした訴えのため政府も禁令の撤回を認めざるを得なかつたのである(PMO, II, стр. 424)。

このようにシベリアの都市にとってカルムクの馬は必需品とされたが、この他にも重要なカルムク商品として、牛羊等の家畜、各種の畜産品や毛皮類があつた。こうした商品はカルムク使節團によつて大規模に持ち込まれたのが普通であるが、小規模には、商人團の場合もある。後者の場合について一例を挙げると、一六三六年に「カルムク人は春夏以來商品の馬を連れてトムスクへ三度來て、その馬をラシヤ сукно・ポーランド産のラシヤ летчина・上等の皮革 кожа красная・

かわうその毛皮 *быдра* と交換した。」(PMO, II, *rok.* No. 13, *r.* 213) とある。

ロシア・カルムク間の交易は一六三八年にアルトゥン・ハーンを訪問したワシリー・スタルコフ *Василий Старков* の報告によれば、既にアルトゥン・ハーンとロシアとの間よりも遙かに盛況となっていたと判断される。スタルコフはジュンガル部支配下のキルギスを通過した際、コンタイシャの部下から次のような叱責を受けた。

アルトゥン・ツァーリは皇帝にどれほど奉仕し、何の良いことをしたのか。彼からどんな利益があるのか。我がバガトゥイリー・コンタイシャとその他のタイシヤらからこそ皇帝に利益があるのだ。即ち「ロシアの」町へ馬・牛及びあらゆる家畜を伴った使節を派遣しており、かくして汝らのシベリアの町は我がカルムクの家畜で充ち、それで生計が立っている。そして汝らの方からは人々が織物を携えてあらゆる種類の取引に來ている。こういう事で我々から皇帝に利益があるのだ。(PMO, II, *rok.* No. 28, *r.* 18)

この發言から窺われるようなカルムクのロシアとの密接な經濟關係も、バートゥル・ホンタイジの卓越した權勢の下に樹立されたと考えられるのである。このように強力な指導者の下に置かれたカルムクのロシアとの經濟關係は雙方の利害に適つて年を追つて發展を遂げて行つたのである。

最後に、ジュンガル王國の成立を象徵する事象として、民族文字の作成を擧げたい。これは一六四八年、ホシュート部出身のラマ僧ザヤ・パンディタが從來のモンゴル文字を改良して作つたもので「明瞭な文字」*ᠮᠣᠩᠭᠣᠯᠠᠳᠤᠰᠤ᠋ᠨᠠᠨᠤᠯᠤᠰᠤ* と稱せられたが、今日一般にはトド(托忒)文字と呼ばれる。トド文字はバートゥル・ホンタイジの下に統合されたオイラト族の民族意識の高まりの内から生れ出たものと解されるのである。

結 語

以上の如き考察から、バートゥル・ホンタイジの王權の下に、オイラト族の民族國家ジュンガル王國が形成されたことは動かし難い事實として確認できるのである。一六四〇年制定の大法典こそこの新國家の統治體制に關する根本法であつ

たと解されるのである。その意味でジュンガル王國の正式發足を一六四〇年と認めてよからう。

ジュンガル王國の君主の地位は、バートゥル・ホンタイジの歿（一六五三年）後、その子センゲ Sengge（倫格）に繼承された。一六六五年にセンゲの本營を最初に訪れたロシア使節⁽⁶⁾ワシリイ・ブベンノイ Василий Буенной の報告によれば、センゲは次の如く語ったという。

我が父コンタイシャの後、今全ウルスを私センゲ Central が支配してゐる。（RMC, I, p. cccxx, II, p. 178, см. ИДЖХ, стр. 214—215）

この發言はセンゲが自らジュンガル王國の君主であることを明らかにしたものと解せられる。この一事を以てしても、ガルダン以前にオイラト族に統一國家がなかったとはとうてい信じられないのである。

以上縷縷述べて來た所から明らかな如く、筆者のオイラト史の構想と宮脇氏の批判とは根本的に相容れないものである。筆者への批判の總括として「十七世紀のオイラト史を根本から考え直さねばならない。」（宮脇、前掲論文）との發言は、筆者の立場からは理解し難いことである。宮脇氏の反論を鶴首して待つものである。

註

- (1) *Sammlungen Historischer Nachrichten über die Mongolischen Völkerschaften*, Th. I, St. Petersburg, 1776, S. 36. 因にバラスの記事は、ミューラー L. Ф. Мюллер に依據したことは明白である（См. РМО, I, стр. 301）。
- (2) 馬氏はバートゥルが一六一六年に父から獨立分居していたことを批判する論據の一つとして、ハワース H. H. Howorth の言う「モンゴルの諸ハーンは在世中、帝國領を諸子に分封することはなかった。」との見方に同意しているが、その誤りなることは得ない。

(3) バッデレーは四人の大タイシヤに對して「(7) Sungar, Derbet, Torghut, and Khoshote,」に注記つづるが (RMC, II, p. 38)「曖昧な表現と言わざるを得ない。因にバッデレーも、バガトゥイリ＝タライ＝タイシヤをジュンガルのバートルと見なしている。

(4) バイバガスがハーンを稱したことを裏付ける記録は同時代的史料の中に見出し得ないが、一八一九年にホシュート王公バートル＝ウバシ＝トゥメン Batur ubaši tümen の著した『四オイラト記 *Dorbn oyiradaiyn tülke*』に「異部四オイラトを統治してゐたハーン＝バイバガス Qan Baybargas」(Тод услин дурсагуд, *Sorbus Scripiorum Mongolorum* Tom. XIX, Fasc. 14, Уланбаатар, 1976, p. 410) の一句がある。なおオイラの文學作品として有名な『ウバシ＝ホンタイジ傳 *Mongolcyn Ubaši qan taşciyin tülke*』は「ハルハのジヤサクトウ＝ハーン麾下のウバシ＝ホンタイジが四オイラトに遠征して敗死した顛末を題材としたものであるが、その征戦の年代はこの作品自體の言う「丁亥(一五八七年)」ではなく、癸亥(一六二三年)と修正されねばならないことが明らかとなった(「ウバシ傳考釋」)。本作品中にも「ホシニートのバイバガス＝ハーン Baybargas qan は一萬六千の健兒を従がえ、……四オイラトの政治・宗教兩方を司つてゐる。」(Гансан Гомбоев, Сказание об Убаши-хунтайджи [текст и перевод], Труды ВОРЛО, ч. VI, СПб., 1868, стр. 204) と書かれている。本作品は文學作品の上、著作年次も不明ではあるが、オイラト人の間にバイバガスがかつてハーンであつたと

いう記憶が残っていたことは認めてよいのではあるまいか。

因に本作品中の歴史的状況を一六二三年當時のものと見なすことには大きな問題がある。ここにはオイラトの有力諸侯を列擧して、バイバガスの他「マンガット (Mangad) の子サイン・セルデンキ (Sayin sendengki) は二千の兵を率ゐる。ホイト (Oyid) のニセルベイン・サイン・キヤ (Eseibeiyin sayin kya) は四千の兵を率ゐる。ジュン・ガル (Jegün yar) のホトゴイト・ハラ・フラ (Qotoyoyitu qara gula) は六千の兵を率ゐる。オイラットのサイン・テムネ・バートル (Sayin temene bayatur) は八千の兵を率ゐる。」(「ウバシ傳考釋」) とあるが、ダライ＝タイシの名は見られない。なお本作品全體を通じて、ダライ＝タイシは一度も登場しないのである。一六一六年にオイラトの最大實力者と目された人物が完全に無視されているのは餘りにも不自然と言うしかない。他方ロシア文書には、一六二〇年以來のオイラト人とウバシ＝ホンタイジ(一アルトゥン＝ハーン)一派の對決において、ダライ＝タイシが活躍した事實を明瞭に記しているのである。例えば、一六二〇年後半期にオイラト勢力はアルトゥン＝ハーンに手痛い敗北を喫し、オビ河とトミ河の間に避難せざるを得なかったが、この時の状況をロシア文書に次の如く言う。

全タイシヤ、即ちトイラ Тоира、クラガライ Кыпаралай、メルゲン＝タイシヤ Мерген-тайша、及び他の全てのタイシヤと、黒カルマク人は盡くオビ河にやって來た。……原文缺……チュムイシ河口に堡壘を築いた。……原文缺……オビ・トミ河間、トムスク市とクズネツク城塞間に越冬遊牧

するつもりである。彼らがオビ河に集まって堡壘を築いたのは、彼らをアルトゥン・ツァーリが撃破して、カラクラ Kaparya から妻子を奪ったからだ。(PMO, I, Док. No. 56, 1621年, 頁. 95-96.)

ここに見えるトイラがダライ・タイシに、クラガライがカラクラに、メルゲン・タイシャがサイン・テネメ・バートゥルに該当することは毫も疑いを挟む餘地がないのである(「カラクラ」)。このような点から見ても、本作品を一六二三年當時の歴史史料として利用することには疑問を抱かざるを得ないのである。

(5) 『西域同文志』卷十、天山路準噶爾部人名四・和碩特衛拉特屬(東洋文庫影印、上冊、一九六一年、五九三頁)。

(6) バッデレーは、この二人のタイシャをバートゥルの弟チュクル Çukür (楚庫爾) とホーウルリユクとに比定している(RMC, II, p. 38) が、前者については誤りとしなければならぬ。

(7) 筆者はバラスに惑わされて、「一六二三年にハラフラは再度モンゴルのために潰走させられた。」(Pallas, op. cit., S. 37) に左祖したが、訂正しなければならない。

(8) この點に關しては、拙稿「アルトゥン・ハーン傳考證」(『内田吟風博士頌壽記念東洋史論集』所收、一九七八年)、参照。

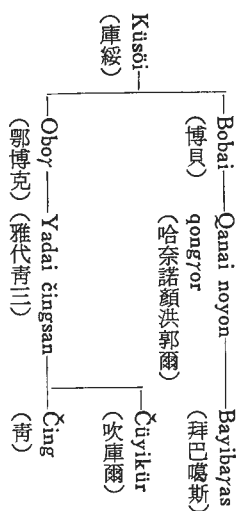
(9) この場合のカラクラ Kaparya がジュンガル部長その人であるとの指摘が編者注(PMO, II, стр. 415, КОММЕНТ. 2 к Док. No. 28)にある。

(10) 宮脇氏は拙稿「オイラート族の發展」中のオイラト・モンゴ

ル戦争の件を批判して、まず「若松氏の言うように、果たしてロシア史料は本當にハラフラが反アルトゥン・ツァーリ闘争を指揮したと述べているのであろうか。」と疑問を提起し、次いで拙稿「カラクラ」中の戦争の経過を批判的に取り上げて、その結論として、「最初にアルトゥン・ツァーリと戦ったのは確かにジュン・ガルのハラフラとトルグートのテネス・メルゲン・テメネであるが、彼等がアルトゥン・ツァーリに破れた後他の四オイラットのタイシャたちが聯合したことがわかる。」と言ひ、又一六二〇年ハラフラらが敗れたことにより、「その結果アルトゥン・ツァーリと四オイラット全てが戦闘状態となり、一六二三年に至って四オイラット聯合軍がアルトゥン・ツァーリを破ったのである。」と言ひ。筆者はカラクラの果たした役割の評価、及び戦争の経過の解釋のいずれに對しても宮脇氏に賛同できない。

(11) 筆者が犯した根本的誤りは、チン・タイシャ・チョクル・タイシャ・バイバギシュ・タイシャの三人をいづれもカラクラの子(PMO, I, стр. 302, 305. см. именной указатель)と受け取ったことであつた。従つて内亂の發端もジュンガル部の紛争にあるとした。これに對し宮脇氏は筆者への批判として、バイバギシュはバイバガスでなければならぬこと、従つて内亂もホシユート部に係るものであることを主張された。この主張は肯綮に當たつてゐると認めざるを得ない。但し同氏はバイバギシュをチョクル・チン兩人と兄弟であるとするロシア側の情報をもそのまま認めてゐる上、チョクルについては、「系譜上」現段階では比定できない。」と述べてゐる。要するに同氏

はこの三人の關係を系譜上に比定できないでいるが、筆者としては、『西域同文志』卷十、天山北路準噶爾部人名四・和碩特衛拉特屬（東洋文庫影印、上冊、五八九—五九三頁）に據る左の系譜上に三人とも比定できると考える。



これに據れば、チン (Čing) とチョクル (Čuyikur) は兄弟であり、彼らに對してバイバギシュ (Baybars) は再從兄弟であつたことになる。従つてロシア情報中バイバギシュをチン・チョクル兩人の兄弟と傳えたのは、再從兄弟の誤傳と見なさなければならぬ。

- (12) これがバートウト部人であつたことは、事件を伝えるもう一つの情報に、バートウイトキャン・タイシヤ Bartykhan-takua (PMO, I, ROK. No. 70, p. 40) であつたことから判る。なおタイタイについては所屬部不明。

- (13) この點について、ロシア情報に言う。チヨクルとバイバギシュ・タイシヤとの間に戦鬪が起つた際に、彼らのウルスからムンガルへ多數のムンガル人捕虜が逃げた。(PMO, I, ROK. No. 70, p. 40)

- (14) バイバガスの死因について、これを戦死とせず、暗殺の如くに傳える情報もある。それは一六三二年一月十二日モスクワの使節廳でカルムク使者に行つた訊問の調書に見えるものである。そこに言う。

使者らは以下の如く述べた。ツァーリ大君に叩頭するために使者らと共にその捕虜を送つたのはバイバギシュの子である。その捕虜はカルムク族で、名をコヌハ Konyxa の子ノトゥチュケイ Horyukei と呼ぶ。彼の父コヌハは普通のタイシヤであつたが、バイバギシュ・タイシヤの祖父—その名は擧げられていない—を殺害し、その後バイバギシュをも殺害した。そこでバイバギシュの子達がその親族と一緒に集まつて、そのノトゥチュケイの父を殺し、その妻子兄弟を諸國へ賣り飛ばした外、その餘の者達も、將來彼らの方からいかなる不軌も働かないように、諸方へ追放した。そのコヌハの子ノトゥチュケイも、バイバギシュの子が陛下に叩頭するため奴隸として送つて來たのである。(PMO, I, ROK. No. 87, p. 21—22)

- (15) この供述はカルムク使者自らの發言になるものだけに信憑性も高いと見なければならぬ。従つてこの供述から按ずると、バイバガスは一六二八—二九年のチヨクル征討戦の最中に實はコヌハ・タイシヤに弑されたものと考えられる。なお拙稿「グシ汗」において、この供述に基づいてバイバガス弑逆の時期を漠然と一六二〇年代末頃と推定したが、今やそれを二六二八—二九年の間に限定することができる。

- (16) ホショート部はこの他、後にその兄オチルトゥとの抗争に

敗れて一六六〇年代にウラル河方面へ移牧したアブライ（バイバガスの子）の遺衆の一部分も加えられたであろう。當のアブライは一六七一年ヴォルガリカルムク王國のアユカーハーンのために敗れて囚われの身となり、それより數年後にアユカーハーンの手でその身柄をモスクワへ送致されて、その地で七四年初に歿した。アブライがアユカーハーンに敗れた際、その部衆の大半はジュンガリアへ逃げ歸つた（「センゲ」）。

- (46) 故バイバガスのウルスは、その死後の一六三六年に至つても猶バイバガスのウルスと稱されていて、グシの名儀に移された形跡がない。本文九一二頁引用の史料（PMO, II, dok. No. 12, 頁. 409）に依れば、バイバガスのウルスは依然存続していて、そこにはオチエタータイシャことオチルトウ・タイジがウルスの統轄者の任に留まつていたことが推察されるのである。而してクジャータイシャことグシ・タイジの場合はオチルトウの後見役の如き任にあつたのではあるまいか。このような見地から、故バイバガスのウルスの主體はその嫡子オチルトウに相續されたと考えられる。なおオチルトウの異母弟アブライの場合、別に獨立してイルトゥイシ河右支流ベシユカ河畔に自己のウルスを擁した。

- (47) *Za hor gyi bonde nag dbaṅ blo bzaiṅ rgya mtshoḥi hdi snañ ḥkhruḥ pahi rol rtsed rogs bñod kyi tshul du bkod pa du kṛ laḥi gos bzaiṅ las glegs bam gñis pa, 17a* [丙午＝1666年、藏古曆6月15日]。

ホシュート部長傳統のハーン號の復活が遅れた原因は、バイバガスの遺産分配をめぐるオチルトウ・アブライ間の對立にあ

つたと考えられる。この對立は、グンジーハトゥンの絶大な權威と、オチルトウがジュンガルのバートウル・ホンタイジと提携したことにより、直ちには顕在化しなかつたらしく見えるが、グンジーハトゥン歿し（一六五二年）、次いでバートウル・ホンタイジも歿し（一六五三年）てからは公然深刻化した。深刻な對立の明白な證據は、一六五七年以來のバートウル・ホンタイジの遺産をめぐるジュンガル部長のセンゲとその兄達の間での武力抗争の際に見られる。この場合オチルトウはバートウル・ホンタイジの後繼者センゲの側に、アブライはその對立者の側に與したのである。このジュンガル部の抗争主體は一六六〇年にセンゲの軍事的勝利を以て終つたが、オチルトウ・アブライ間の確執は抜き差しならぬ羽目に陥り、翌六一年センゲの支援を得たオチルトウがアブライをその本據地ベシユカ河畔に包圍して決定的勝利を奪つた。この敗戦を期にアブライは没落の道を辿り、ついにウラル河へ向けて去らねばならなくなったのである（以上の経過については、「センゲ」参照）。

このようにオチルトウとしては、古くからのライバルのアブライを完全に葬つて、ホシュート部に専制權力を打ち建てた後、始めてダライラマにハーン號の授與を乞うたものと考えられる。

- (48) これまで本稿でグシ・ハーンの呼稱を用いて來たのは便宜上のことであることを諒とされたい。本来ならグシ・タイジと稱すべきところである。因にグシ・ハーンの呼稱の起源に關して、山口瑞鳳「顧實汗のチベット支配に至る経緯」（『岩井博士古稀記念典籍論集』東京、一九六三年）に、グシ・ハーンがその二

十五歳(一六〇六年)の時、ハルハとオイラトの紛争を調停し、¹⁾「Halha の諸酋より ston hkhori chos rje なる Tahi gucri の稱號を乞ふ、以来 Gucri han と稱せられた。」と書し、²⁾「ハルハ文獻」(*Drag bsam lion bran, Relu mig, Me-Ria* = 1606年; *Hisho shon gyi lo rgyus* = Ho-Chia Yang, *The Annals of Kokonor*, Bloomington, 1969, p. 35; *Garis can yul gyi sa la spyod pa'i mtho rts ky'i rgyal blon gtso bor brjad pa'i deb ther rdsogs ldan gshon nuhi dga'i ston dpyid ky'i rgyal mo'i glu dbyans* = 西藏田記、北京, 1981, p. 192) によつて、³⁾「Tahi gu cri の稱號を受けたとは記すが、『以来 Gucri han と稱せられた。』の一句は見られない。従つてこの句は山口氏の據つた史料の誤りか又は同氏の潤色と見られぬ。

(1) Zahiruddin Ahmad, *Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century*, Roma, 1970, p. 146.

(2) ホンタイシ(コンタイシヤ)の使用例が最も早く史料に現れるのは、一六三五年三月三十日作成と推定されるアルトゥン・ハーンの側近ダイン・メルゲン・ランズのロシア皇帝宛嘆願狀(PMO, I, dok. No. 115, p. 125)の中である。(本文八五頁参照)

(3) 十七世紀のロシア文書では、オイラト族を黒カルマクと稱したのに對して、オビ河東岸流域、アルタイ北麓地方のテレウト族(Teleuty (テレングト族 Теленгуть))を白カルマクと稱した。この白カルマクからのヤサク徴收權を握つてゐたのは、キルギスの場合と同様、ジャンガル部であつたと考えられる

(「グシ汗」)。

(2) トウルゴチャとは、クンドロン = ウバン、Kundoljüng ubasi (昆都衛烏巴什)の別號 Dörügei (都爾格齊)に比定し得る(「グシ汗」)。

(3) タイシヤがグシ・ハーンと同一人物であることの論證は「グシ汗」参照。

(4) ロシア文書ではその名は Кыбжкар を基本型とする。その位置は、和博克必拉と薩里阿林の方面に當ると見られ(『清代一統地圖』臺北、一九六六年、八九頁)、今日の和布克賽爾蒙古自治縣に含まれるであらう。

(5) ハートナルによる都市建設に關してロシア文書中の記事を整理紹介した論文で、Г. И. Слесарчук, Новые данные о городах Джунгарского ханства (Олон улсын монголч эрдэмтний II их хурал, II боть, Улаанбаатар, 1973, стр. 113—116, がある。この問題に關する詳細は上記論文に譲り、筆者としては本論文を参照しつゝ要點だけを述べる。

(6) Уеуча とは蒙古語 Enchi (醫學者の意)であらう。

(7) ジェンガル王國におけるブハラー人の役割については、羽田明「ジェンガル王國とブハラー人—内陸アジアの遊牧民とオアシス農耕民—」(『東洋史研究』第十一卷六號、一九五四年。後に羽田明「中央アジア史研究」臨川書店、一九八二年。第五章に收録)に詳しく論ぜられてゐる。

(8) Biography of Gaya Pandita in Orat Characters, *Corpus Scriptorum Mongolorum*, Tomus V, Fasciculus 2—3, Ulanbator, 1967, 18b.

(62) この頃のダライとバートゥルとの關係を示す一例を擧げよう (См. ИДЖХ, стр. 172)。事は一六三四年、ダライ、グシらによるバラバリタール人の拉致事件に關してである。一六三六年にバートゥルに派遣されたトミラ・ベトロフは、バラバリタール人の送還のための斡旋をバートゥルに要請したが、この時バートゥルは次のように答えた。

彼 (バートゥル) はその捕虜の件に關してクイシヤ (ダシ) とタライー兩タイシヤに使者を以て申し送ることにしよう。又彼自身からもクイシヤとタライー兩タイシヤに對して、彼らと會合した折に、その捕虜の件と陛下への奉仕の件について話すことにしよう。(中略) もしクイシヤとタライー兩タイシヤがコンタイシヤに従わず、ターラとトゥメニの捕虜を引き渡さなかったり、或いは配下の者を陛下の町へ攻撃のため送り込んだりしても、彼としては彼らを抑えることはできない。ただ彼コンタイシヤの方からは陛下の民と戦うことではないであろう (PMO, II, док. No. 9, п. 41—42)。

以上の如くバートゥルは答えたが、その忠告がダライに相應の影響を與えたことは確かである。というのは、ダライは間もなくトボリスクに使者を送って、この問題の釋明やら捕虜送還の約束やらに懸命に努めているのである。即ちダライは使者を紹介して、ロシア皇帝がこの問題のためにその軍を彼のウルスへ派遣しないよう嘆願し、又トゥメニ城下への侵入が彼の知らぬ間に行われたと釋明し、その際の捕虜については調査して送還するまで約束したのである (PMO, II, док. No. 44, п. 42)。ウエー・リヤザノフスキー著・青木富太郎譯『蒙古法の基本

原理』(生活社、一九四三年。復刻、原書房、一九七五年、五三一—五四頁)。

(61) 島田正郎『東洋法史』(東京教學社、一九七四年、二〇七頁)。

(62) リヤザノフスキー、前掲書、五三頁。

(63) 宮脇氏は、筆者の集會提唱者をバートゥルに、集會をタルバガイ山とする説を非難し、『ザヤー・バンディタ傳』(Biography of Zaya Pandita in Oral Characters, 4ab) を引用して、「以上により、一六四〇年の集會は、ハルハ・モンゴルのジャサクト・ハーンの提唱により、恐らくはハルハの地で開催されたものと推定できよう。」と述べているが、當の譯文がかなり恣意的であり(例えばその譯文によれば、法典制定の集會の年は己の年一六四一年になってしまふであらう)、原文に就いて見ても氏の言うような解釋を引き出すことは不可能である。

(64) バートゥル・ホンタイジとロシアとの關係については、左の論文が有益である。筆者も多大の啓發を受けた。就きて参照されたい。

М. И. Гольман, Г. И. Слесарчук, Русские архивные материалы о взаимоотношениях России и Монголии в 30—50-х годах XVII в. *Краткие сообщения Института народов Азии*, 76, Москва, 1965, стр. 166—181.

(65) 以下、ゴリマン・スレサルチュク、前掲論文、参照。

(66) センゲへのロシア使節の往訪が遅れた理由は、センゲの登位直後にセンゲとその兄達の間に父バートゥルの遺産争いが生じ

ためである。この紛争はホシヤータ部のオチル・ツ・アブライ兄弟間の抗争も絡んだことで、王国の一大内亂に發展した。この内亂は一六六一年に終熄したが、ロシアからジャンガル王国への遣使は一六六五年まで完全に杜絶状態であった（「ヤンダ」）。

〔略語表〕

- RMС, I, II=J. F. Baddeley, *Russia, Mongolia, China*. London, 1919, vol. I, II.
 PМO, I=Русско-Монгольские отношения, 1607—1636. Сборник документов. Сост. Л. М. Гагаулина, М. И. Гольман, Г. И. Слесарчук. Отв. ред. И. Я. Элягин, Н. В. Устюгов, Москва, 1959.
 PМO, II=Русско-Монгольские отношения, 1636—1654.

Сборник документов. Сост. М. И. Гольман, Г. И. Слесарчук. Отв. ред. И. Я. Элягин, Н. В. Устюгов, Москва, 1974.

ИДЖХ=И. Я. Элягин, *История Джунгарского ханства*, 1635—1758, Москва, 1964.

「ウバンシ傳考釋」=岡田英弘「ウバンシ・ホнтаイシ傳考釋」（『遊牧社會史探究』第三二冊、一九六八年）

「カラクラ」=拙稿「カラクラの生涯」（『東洋史研究』第二二卷四號、一九六四年）

「ヤンダ」=拙稿「ヤンダ支配期のジャンガル汗國の内亂」（『遊牧社會史探究』第四二冊、一九七〇年）

「グシ汗」=拙稿「ロシア史料より見たグシ汗の事績」（『史林』第五九卷六號、一九七六年）

THE FORMATION OF THE ZUNGHAR EMPIRE

WAKAMATSU Hiroshi

The Zunghar Empire competed with the Qing for hegemony over northern Asia from the late 17th century until the mid-18th, but as yet there is no widely accepted view as to when the empire was established. Most recently, Japanese scholars have proposed that the empire was founded by Galdan Boshogtu Khan in 1678. This view however ignores the state established among the Oirats before Galdan's time. I therefore cannot agree with it. It is more likely that the Zunghar Empire was established under the authority of the Zunghar chieftain Baatur qong tayiji. The Great Code (Yeke čaaji) which was instituted in 1640 forms the constitution of this empire.

The following basic problems were investigated in an attempt to elucidate the course of the formation of the Zunghar Empire:

1. The political tendencies of the Oirats during the early 17th century.
2. The rise to power of the Zunghar chieftain Qara Qula.

Here, I have primarily investigated the military role played by Qara Qula in the continuous wars between the Oirats and the Altin Khan of the Western Khalkha which started in 1620, concluding that Qara Qula's rise to prominence was intimately related to his military successes in these struggles.

3. The political position of Qara Qula's son Baatur qong tayiji.

Here, I have concentrated on an investigation of the various problems concerning the formation of Baatur qong tayiji's *ulus*, the political and economic relations between his government and that of Russia, and the institution of the Great Code (Yeke čaaji).

In accord with the above researches, I have concluded that the unification of the state of the Oirats was established under the authority of Baatur qong tayiji.